
魔界公爵令嬢の野望？

森四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界公爵令嬢の野望？

【Nコード】

N3437X

【作者名】

森四季

【あらすじ】

魔界公爵令嬢リーシャディエト（御年10歳）は実は水原理沙（享年20歳）の生まれ変わり。美貌と魔力と金と地位とを持ち合わせた彼女の望みは「侍女になりたい」、そしてその方法は「協力者になってくれそうな子どもを連れてきて育てる」という計画。ところがどの子も訳ありで…。もはやそれは手段なのか目的なのか、そんな彼女の子育て記。

プロローグ（前書き）

この作品には残酷な描写がかなりあります。特にはじめのうちは大変痛い描写もあります。タグを見るとコメディに見えるかもしれませんが米分は少ない気がします。また、まえがきでの注意喚起は携帯での閲覧の場合流れぶち切り感が強いと思っっているので、以後一切行いません。同性愛を匂わせる描写が入る可能性もあります。地雷踏みにはご注意ください。自己責任という言葉は嫌いかもしれませんが俺は君の強さを信じているッ！ いえ駄目なら無理せず逃げてください。

では、どうぞ。

プロローグ

生まれ変わったら何になりたい？

吐息のようにささやかれた声に、自分はなんと答えただろうか。

生まれ変わりなど信じているのか、と笑ったことは覚えている。それまで考えたこともなかったことだから。そんなことを信じている相手でもないと思ったから。

でも。

「……他人に迷惑かけない程度に元気な自分になりた、かった」

きわめて切実な、それは願望だった。

過去形でしか、望めない。

吐き出した声が震える。それだけを告げるだけで全身が痛い。多分もう限界なのだろう。

目を開けていられずに、閉じた。急速に落ちる意識。

まどろみにも似た、けれど、もう戻れない深淵に。

「あと、よろしく」

言うことは言った。できることはしてきた。どうすることもできないことは、仕方のないこと。

だから。

せめて最期に、楽しい夢を見よう。

もし生まれ変われるなら？

男になってみたいかもしれない。そして可愛い女の子にモテてみたい。ハーレム上等。良いではないか可愛い正義。全力で愛すべき。でもバリバリの英雄とかは無理そう。天才軍師とかも捨てがたいがあいにくそんなに頭は良くない。魔法使いとかはいいかもしれない。修行は大変そうだけど魔法の為なら耐えられる気がする。お姫様はだめだ。さらわれたりいろいろされたり自由は無いで大変だ。でも横からお姫様を眺めるのはとても面白そう。お邪魔虫要員にも、彼女の支えにもなれるポジション。ああ、そう。

私は侍女になりたい。

なんてね。

声にならない想いを最後に、自分の意識は途切れた。

Plan 計画をたてましょう

水晶の中にともる光に照らされた、さほど広くない部屋で、リサは一生懸命書き物をしていた。時折その小さな手が止まり、紫水晶のようだとと言われる瞳が宙をさまようが、それもわずかのこと。すぐに視線は机上の紙に戻り、インクを付け直して羽ペンを滑らせる。その仕草で黄金色の巻毛がかすかに揺らめいた。

小さく華奢なその背に流れる腰程までの髪は、結い上げずとも豪奢で美しいと誉められるものであるが、現在きわめて無造作に束ねられている。その身を包む柔らかな薔薇色のドレスの右袖には、インクにじみが付いている。付着に気づいて拭き取ったものの、かえって押しひろげてしまった。

幾枚もの紙が大きめの机の上に並べられているのは、インクを乾燥させるためだ。そこに書かれている流線型の文字と、彼女の左手側に置かれた小さい紙とに書かれている直線を多用した文字は明らかに異なるものだが、彼女は時折その小さい紙に目を落とすつつ、さらさらとペンを滑らせていく。

そして最後まで書き終えてペンを置くと、始めからざっと目を通すと、満足したかのように大きく頷き、リサはよいしょとその背からは少し大きな椅子から降りた。狙いすましたかのようにノックの音が響き、彼女は「どうぞ」と応える。

「ずいぶん根をつめておいででしたな、嬢様」
入ってきたのは、砂色の混じる白髪を後ろにきちんと撫でつけた男。目尻に刻まれた皺やきちんと整えられた白い髭は彼がそれなりの年齢であることを示しているが、燕尾服に包まれたその背はぴしっと伸びて、老いの衰えは感じさせない。

手前に置かれた小さな卓に、用意してきた焼き菓子や茶器などを並べていく彼に、小さく頷くと、リサは先ほどまでせっせと書いていた紙を手にして近寄った。お茶をカップに注ぐのを確認して、ひ

よいとそれを差し出す。

「良い香りね。ありがとう、じいや。……ま、座って、これを読んでほしいの」

じいやと呼ばれた彼がそれを受け取ると、リサは椅子に座り、カップに口をつけた。温かいそれにほっこりと微笑むその姿はひどく愛らしいものであり、じいやことアーネストは目尻を下げたが、渡された書類に目を落とした彼は、その見出しに軽く眉を寄せた。

「……協力者育成計画……？」
「うん」

こつくりと頷くと、リサは無造作に手を伸ばして焼き菓子を取り、一口食べて顔をほころばせる。常ならば主のご機嫌なその様子を微笑みつつ見守るアーネストだったが、彼は何度も書類とリサの顔を見比べ、珍しいほどの動揺を見せた。

「……嬢様」

「なあに？ 分からないことあった？ ちゃんと理由も書いたつもりだけど」

確かにきちんと書いてあった。人界は身元が不確かだと上流階級で雇用がなされにくいこと、そのためそういうところで働くためには身元保証人となる者が必要であること、なるべくその保証人とは信頼関係を築いておいた方が、彼女の素性がバレたときにもやりやすいこと。丁寧な字で書かれたそれは共通語、決して読めないものではない。しかし。

「……嬢様。いえ、リーシャディエト・シエルニル＝フィール・リグ・ディナレンス様」

リサの正式名を口にし、アーネストは小さな主を見た。

「この魔界の筆頭たるディナレンス公爵家のご令嬢である貴女様が、なにゆえ人界で雇用されなければならないのをごさいますしょう？」

常になく困惑の表情を隠せないアーネストに、彼の主は重々しく頷いた。

「そう。ちよつとあの人が偉すぎるのよね」

ちよつとどころでは無い。御前会議の六貴族に名を連ねる由緒正しき魔族の長であるディナレンス公ハーヴェルカデイス、魔王陛下の側近たるその人がリサの父親だ。

しかし彼女は、決して彼を父とは呼ばない。

言葉を発するようになり、初めて対面した時も、当時3歳のリサは「パパですよー」と笑み崩れるハーヴェルカデイス 外見年齢は人間換算で25歳程度、超絶美形かつ冷酷非情と名高い彼には大変珍しい表情であったのだが 真顔で言い放ったのだ。

「申し訳ありません、あなたを父と思いいくいので公爵閣下とお呼びします」

ちなみにその言葉で凍り付いた公爵の表情など史上初モノのレアさ加減であった。以降、どれだけ言い聞かせてもなだめても頑として譲らないリサに、結局アーネストは諦めたのだが、公爵本人は未だにパパと呼ばれる野望を抱いている様子。

閑話休題。

「あの人は私をまおーさまの妃とかにするつもり満々みたいだし。別の公爵とかのところに潜り込もうと思っても、魔族って人数少ないから顔割れたらすぐ分かるみたいだし。だから魔族だと私を雇ってくれそうな所はなさそうでしょう？ だから」

リサの返答に、アーネストは小さくため息をついた。

「賢い」公爵様にしては、ずいぶんと迂闊な失敗をなさりましたな。

4年前の事件の折、血相を変えてかけつけてきた公爵が発した言葉を、リサは流してはくれなかったらしい。

「魔王陛下が、お嫌いでございますか？」

「会ったことがないから分からないけど怖いしあまり会いたくないし……とりあえずお妃様って面倒そうだし」

おそらく最後が本音だろうとアーネストは思った。彼の嬢様はその気になれば 例え伯爵の前であるとか 伯爵令嬢にふさわしい淑女のふるまいを完璧にやっつてのけるが、基本的にはその美少女然とした姿を裏切る無駄と面倒が嫌いな合理主義者で、かなりざつくりな性格である。まあそれでもお可愛らしいのだが。

アーネストは、再び手元の書類に目を落とした。できるかどうかはさておき、主が何を真に望んでいるか把握するのが彼のつとめ。

どうやら嬢様は、人界の上流階級 王侯貴族の元で雇用されようとしているらしい。嫁ごうとしているわけではない。つまり。

「侍女になることがおのぞみでございますか？」

「うん」

頷いて、リサはお茶を一口。

「まあ、まだ、この形だから。今すぐどうこうというわけじゃないわ。子供の内から特別教育しておいて、がんがん出世してもらって、私が大きくなった時に身元保証人になってもらえば都合がいいでしょう。教育には時間がかかるものだし」

御年10歳の彼女は、現在の外見は人間の10歳とさほど変わらない。純粹な魔族は成人するまでは比較的人間と同様に外見が成長していき、成人してからは極めてゆつくりと歳をとる種族だ。

書類のすべてに目を通し、深々と息を吐き出すと、それを見て取ったリサはカップを置いて姿勢をただした。

「私一人だと手に余ることで、じいちゃんには何の得もないことなのは分かっているの。でも、お願い……協力してもらえないかな？」

その上目遣いの表情は卑怯でございます 内心で呟き、アーネストは再度深く息をついた。その愛らしさが彼の心をがっくんがっくん揺さぶるのだが、何より彼の大切な主君である嬢様は、やると決めたことはいかなる手段を用いてもやりとおそうとするのだ。彼女が誕生して十年、産まれたときから彼女を見守りつづけてきたアーネストはよく分かっていた。こんな計画書を用意する段階で、もう彼女にはやり遂げるつもりしか無いのだ。

ここで迂闊に止めた場合、彼女は確実に 家出する。これまでの経験で彼はきっちりそれを理解させられていた。慎重に、口を開く。

「ここでの暮らしは、お寂しいですか？」

「……そういうことは、感じないわ」

ゆるゆるとかぶりを振って、リサはいらえた。

「すごく良くしてもらってる。でも私、あの人の望むようにはなれそうにないから 役に立たないから。だから、大きくなったら一人でも生きていけるようにならないと」

言いにくそうに告げられた言葉に、なるほど、とアーネストはひとりごちた。

父と呼ぶ気は無いけれど、世話をしてもらっていることには感謝している。しかし公爵が望むように妃にはなれない というかなりたくない 為に、ずっとここにいられるわけではないと考えている、と。

けれど彼女は知らない。なぜ、彼女を溺愛している公爵が、本邸ではなく、辺境の地の小さな別邸に彼女を住まわせているのか。世間から隠すように、ひっそりと育てているのか。側付きのアーネストが、そのことでどれだけ公爵から嫉妬されているか。

いずれ分かること。今はまだ、知らせる必要のないこと。

「嬢様。……ここは、この家の主は、嬢様でございますよ」

アーネストは、小さな主にほほえみかける。

「嬢様のなさりたいようになさいます。そしてわたくしのご事は、如何様にもお使いくださいませ」

リサは、花開くように微笑んだ。

「ありがとう、じいちゃん」

その愛らしさに頬を緩めつつ、アーネストは一礼した。

協力者育成計画案

> 目的 <

- ・ 人界における協力者となる人材の中長期的育成

> 立案理由 <

- ・ 人界では身元が不確かだと上流階級で雇用がなされにくい
- ・ よってそういうところで働くためには身元保証人となる者が必要である
- ・ なるべくその保証人とは信頼関係を築いておいた方が、素性がバレたときにもやりやすい

> 目標 <

- ・ 10歳前後の子ども3名程度、最大5名の確保
- 最終的な協力者は一人でもかまわない

> 行動手順 <

- ・ 対象の選定

占術にて、候補を絞り込む。人探しの応用として可能であることをミアンに確認済み。絞り込み条件は、将来有望そうかつ信頼できそうな該当年齢の少年少女。

カードのみだと特定に手間取る可能性あり、ダウジングも併用する

- ・ 勧誘

自分が担当。協力的な人物であるかを実際に確認。対象本人の合意を取る。目標数が確保できた段階で帰還。基本待遇は三食おやつ

つき、昼寝もOKとする。

手みやげとしてプリンを用意する。

・教育

魔術面でミアンの、体術面でゼスの協力取り付け済み。おおまかな部分は自分で担当。じいやにも協力をお願いする。その他適性が見られる場合には、他所より教師を呼ぶことも検討。世間知らずになるのは困るので、慣れてきたら週に1、2日程度ずつ社会体験をさせる。

時期等は都度考慮。

・食事等

成長期の子どものもので、食事はバランスの良い物を用意。飼育舎および菜園の規模拡大が必要。基本的には二人一組の部屋割り。

・接し方

基本的になめられない程度に優しく。

>想定される問題<

・ホームシックになった場合

勧誘の時に、人界に戻るのは基本的に期間終了後であることをあらかじめ説明はするが、可能なら家の近くにつれていく。その際本人が強く希望した場合、夢見の魔法による記憶封じをかけ、帰す。無理強いはいしない。

長期的なモチベーション低下などに陥った際（怪我や病気に基づかないもの）にも、同様の対処とする。

・期間終了時人界に戻りたくないという場合

本人の希望を入れる。就職先などは、可能な限り支援する。ただし初回のみ。

>期間<

人界での成人が15歳程度ということから鑑み、自分が成人するまでの6年間。

『うん、よし。多分、大丈夫』

小さく日本語で呟いて、ネグリジェ姿のリサはここ数日何回か見返した計画書を卓上に置いた。

人界の地図も用意した。彼女の魔法の先生であるミアンに作ってもらった、矢印が刻まれた細いチェーン付きプレートも蓋付きのバスケツトに入れた。プリンは明日アーネストが用意してくれることになっている。

よいしょ、と天蓋付きふかふかベッドに乗り上がり、リサが5、6人は一緒に寝れそうな大きなそれにごろんと転がると、リサはひとりごちる。

10年か。

もう、そんなになるんだ。 「水原理沙^{ミスハラリサ}」が死んでから。 「リサ」が生まれてから。

長いようで短かった気もする日々。今はもう、会話に関しては意識しないでこちらの言葉をつむげる。書く方については日本語の方がしっくりくるけど、読む方については何の問題もない。いたれりつくせりな環境で、学ぶ時間は十分にあった。本はたくさんあったし、彼女のじいやは彼女の突拍子もない質問にもほとんど動じることなくいろいろ丁寧に教えてくれた。

子どもらしからぬとは自分で時々思うものの、あえて子どものようにふるまうのも、一応20歳まで生きていた水原理沙としては気恥ずかしいので無理に装いはしなかった。それにも、じいやは変な顔をすることもなかった。子どもの守役をするのが自分が初めてだとはいわれたけど、あまりにも手慣れている様子なので、本当かど

うかは　まあ、どうでもいい。

水晶の明かりを小さくして、かなり薄暗い室内でも分かる自分の長い金髪をリサは手に取った。

転生なんて、信じてなかったけど。

飢えることも、凍える寒さも、何も無い。与えられるのは綺麗なドレス。鏡に映るのは、金髪の、綺麗な女の子。にやりと笑ってさえすら可愛らしく見える少女。

走っても心臓が痛むこともない。夜な夜な激痛に叫びたくなるのをこらえる必要もない。憧れの魔法を使うことができる。特に転移術と結界関係の術は、ミアンから魔界随一のレベルとお墨付きをもらった。魔力というやつも、他の人に比べてもとても強いらしい。

ただの人間の、しかも原因不明の難病持ちで、弱っちくて。痛みに眉をしかめるのに慣れすぎて、眉間がちり皺が刻まれている、地味でかわいげのない水原理沙とは大違いの少女。それが、リーシャディエト・シエルニル＝フィール・リグ・ディナレンス。おまけに魔界公爵令嬢。

それが今の理沙の体。

美貌も力も地位も多分金もあるって何その転生チート、と思った。笑った。前世で苦しんでいた分のご褒美ですか、と思おうとした。

けれど　喜べなかった。

真っ先に頭をよぎったのは、カツコウの托卵。

ほかの鳥の巢に、良く似た卵を産みつけて、自分では何もせず育てさせて。他の卵は落として殺してしまい、何食わぬ顔で餌をねだる。鳥に人間の倫理感を押しつけるのは間違いだと理解していても、初めて知った時はかなり衝撃をうけたその行為に、自分の状況は良く似ていると思った。

居心地のよすぎる、贅沢な環境。本来それを享受すべきなのは、リーシャディエトで、理沙じゃない。

奪ってしまったのだ、と思った。

父である公爵を父と呼ばないのも、そのせいだ。

多分喜ぶのだろうと思う。でも自分は、あなたの可愛いリーシャじゃないのだ。それが、心苦しくて、いつそ嫌ってくれたらいいのに、と思った。だから、よそよそしくすることにした。まあ、政略結婚に貴族の娘が使われるのはデフォルトとはいえ、魔王の妃うんぬんは「はあ？（冷たい目）」だったか。

考えすぎるところがあるとは、自分でも思っている。家族にも指摘されたことがある。けれど、ろくに動かせない体で、唯一できたのは、考えることだけだった。それが、水原理沙という人間の、生存証明だった。20年間そうしてきたので、もう直らないんじゃないかと思う。

10年。

ほとんど病院か家にこもりっきりで、頭でっかちであるものの社会経験というのがほぼ皆無なりサが、ようやく一步を踏み出すことができた時間。だいぶん、かかった。

けれど。

「がんばろう……うん、がんばる」

一度ぎゅっと拳を握りしめ、リサは目を閉じた。

明日は、これまでで一番忙しい日、だから。

D o 実際に行ってみましょう

メリスメルの場合

「あなたは特別な娘なのです」
告げられた言葉に、何の感慨が抱けようか。

白い甲冑の大人たち。両親が彼女の名を呼ぶのが聞こえ、続いて鈍い音と共に聞こえた母の悲鳴。暴れた手足に苛立ったのか、呪文を紡ぐ声が聞こえて、強制的に眠らされ。

目を覚ました時には、白い石の部屋に寝かされていた。

ヨゲンノセイジョデアル。シンデンニテヒゴイタシマス。

知らない。そんなもの知らない。

家に帰して。父さん、母さんに会わせて。

叫んだ声は拒絶された。丁寧に、けれど完全に、彼女の意思は無視された。

俗世の穢れを払うためと、水以外口にすることを許されない日々が過ぎ。

ようやく口にできた、ほとんど味のしない食事も、彼女が従順でなければ与えられず。

無視され続けた叫びは、いつしか発することもなくなった。

聖女様、と皆が自分を呼ぶ。

メルは、メリスメルは、どこにもいなくなっていく。

繰り返される儀式。袂の水の冷たさに震える日々。彼女の名は誰

も呼ばない。

聖女様。

小さな「聖女」の瞳には、何の色も浮かばなくなった。

冷たい硬い床で祈りを捧げる毎日。

時折やってくる、豪華な服をまとった大人に祈りの言葉を告げて感謝と喜びの声を上げる彼らに、静かなまなざしを向けて、彼女は彼らを哀れんだ。

ここにいるのは人形だ。「聖女」という名の人形だ。

中身なんて、もう、からっぽになってしまった。

調べられた中庭に、ある日小鳥がやってきていた。巣を作っているところだった。

儀式の合間、彼女は中庭に出てその巣を眺めた。上手に作るなど感心した。

そして次の日、巣はきれいに片付けられていた。

不浄を持ち込ませるわけには参りませぬ。

告げられた言葉に、ただ、頷いた。

あの鳥がどこに行ったかは、考えないことにした。

儀式と祈り。ひたすらにそれを繰り返す日々。

白い石の神殿で、白い服を身にまとい、白い人たちに囲まれて。

聖女様。

清らかなる聖女様。

我らをお救いください、聖女様。

人形にすぎる壮麗な衣をまとう人たちを眺めて。

何度目かの秋が来た。
散り行く赤い葉に、久しぶりに中庭に出た。
かつて鳥の巣があったところを見上げたそこへ。

ふわりと、黄金が降り立った。

「こんにちは」

違った。それは、とても とても美しい、黄金の髪の少女。
藍色のドレスをまとい、片腕にバスケット、右に矢印が彫られた
板のついた鎖を握り、少女はにこりと微笑んだ。無造作に降り立ち、
彼女の前に立った。

息が、止まるかと思った。それほど、少女は綺麗だった。

「あなたみたいね。 私はリサ。あなたの名前は？」

可憐な、けれど落ち着いた声の問いかけに、彼女はようやく息を
取り戻した。

「なまえ。 名前。私、の？」

「うん、あなたの」

リサと名乗った少女は、紫水晶の瞳でまっすぐに彼女を見つめて
いた。

からっぽだったところに、何かが、広がっていく。

ああ。

なんて、綺麗。

しばし見とれたその時。

「お前 何者！？ 聖女様から離れなさい！」

響いた誰何の声に、少女は彼女から視線をはずし、そちらを見て、
再び彼女を見た。

「……聖女様？」

「っ違うの！」

彼女は、叫んだ。必死に、かぶりを振った。

「私は　メリスメルっ。そんな名前じゃないのっ。聖女様なんかじゃないのっ」

「メリスメル」

少女が、彼女の名を呟く。それだけで。

どくん、と。

これまで止まっていたような、鼓動がはねた気がした。

「素敵な響き。　ね、メリスメル」

す、とりサが右手を差し出す。

「私、魔族なんだけど。協力者募集中なの。よければ、ちょっと魔界に来てみたい？」

「連れて行って！」

即答していた。その手を、ためらいなく取った。

りサはわずかに目を見開き、次いで優しく微笑んで、そしてかけつけてきた大人たちを見回して。

「じゃあ、この子は頂いていきますね。　目を閉じて」

悲鳴と怒号は一瞬のこと。優しく抱きしめられて、彼女は　メリスメルは目を閉じた。

温かい腕は、何も怖くなかった。

レイニールの場合

村が、燃えていた。

国境近くにある小さな村。街道沿いからは少しはずれて、さして裕福とはいえなかったけれど、皆が協力して、ささやかに、つつましく暮らしている村だった。

その村が、襲撃された。

誰にかは分からなかった。名乗るわけではないし、名乗れるわけもない。傭兵くずれの破落戸かもしれないし、野盗の集団かもしれない。折しも収穫の終わった頃、冬への蓄えや実りの対価として受け取った貨幣などが、村にある頃だった。

そこを、狙われた。

襲撃者たちは巧みだった。一度に数力所に火の手が上がり、鎮火に飛び出した村人たちを次々と切り殺していった。

果敢に挑んだ男もいたが、複数人で一人を囲むという方法にでは、太刀打ちもできない。そういった戦い方に、襲撃者たちは慣れているようだった。

突き立てる刃には何の躊躇も見られない。目以外を布で覆った彼らは、邪魔物を片づけてから、略奪をするつもりらしかった。容赦は、なかった。

大人も、子どもも。老人も、幼子も。

挑んだ父は、殺された。

父に泣き叫んですがりついた母は、連れていかれた。

母を連れていかれまいと、すがりついた彼は、すぐに蹴りとばされて転がされた。地面に激しく叩きつけられて、揺れる意識の中、いくつもの靴が彼を蹴り、踏みにじった。

突き刺さる激痛と、骨がごりっという音が彼の脳に届いたのはほぼ同時。絶叫は声にならず、彼は気絶した。

目を覚ました彼が見たのは、夕陽に染まる焼け焦げた家々。

のろのろと起き上がり、彼はぶらんと奇妙な方向に曲がった右腕に顔をしかめた。

誰かいないかを探すために、痛みをこらえて立ち上がる。

全身が悲鳴をあげるが、彼はゆっくりと歩きだした。

火はすでにほとんどくすぶりかけていて、黒くすすけた村には、動く物の気配は彼しもなく。

血塗れで倒れている物言わぬ骸の横を通り過ぎ、家をのぞき、誰もいないことを確かめて。

生きている人がもういないことを、彼が悟らざるをえなくなったのは、宵闇が空を覆い始めた頃。

村を見下ろす丘の上にある小さなほころの石段に、彼はのろのろと座り込んだ。

全身が、右腕が痛くて、おっくうで。

ほんやりと、星が瞬き始めた夜空を見上げた。

その時だった。

目に映ったのは、黄金色だった。

「ああ、良かった。生きてた」

ほっとしたような、声。ずっと聞いていたくなるような、綺麗で優しい声。

のぞき込まれて、彼は息をのんだ。

「あ……」

心配そうに自分を見つめる、声にならないくらい、美しい少女。身じろぎしかけた彼を、少女はしかしそつと制す。

「ちよつと待つて、動かないで。今、治すから……」

彼女の唇から、歌うような言葉が流れだす。

触れられたところから、右腕が、じんわりと温かくなった。そしてその温もりは、全身に伝わっていく。

心地よさに目を閉じた彼は、しばらくその温もりに浸った。しかし、それもわずかの間。

少女の歌が途切れ、触れていた温もりが離れてしまったのをひどく残念に思いながら、彼は再び目を開けた。

「もう、大丈夫だと思うけど。どうかな？」

「……どう、し」

て、と言いかけて彼は激しく咳きこんだ。煙でやられた喉が、乾いて貼り付いたようになっていた。

少女は、すぐに持っていたバスケットを開けて、中から筒状の容器を取り出した。蓋をくるくると回して開けると、カップ状の蓋の方に筒から液体を注ぐ。

「お茶だけど、まずうがい……口をすすいで。喉の奥から、がらがらつて。飲み込まずに吐き出して」

肩で息をする彼に蓋が渡され、彼は言うとおりにした。何度かやって、多少楽になり、液体が空になったところで、ひよいと彼から取り戻した少女は、再びとぼとぼと液体を注ぐと、彼に手渡してきた。

「ゆっくり飲んで。一口ずつ」

温めのそれは、香ばしい良い香りがした。

彼と同じくらいの年頃のように見える少女に、その様をじつと見つめられるのになぜだか気恥ずかしさを覚えるけれど、渴いた喉は水を欲していた。言われるがままに、一口含む。ゆっくりと飲み込

むと、少女はにっこりと笑った。

綺麗。可愛い。

見とれてしまった。数拍後、取り落としかけた蓋を慌てて握りなおして、彼は再びお茶を口に含んだ。顔が熱い。

どうして、こんな綺麗な子が、こんなところにいるんだろう。こんな

「ごめんなさい。ここに来たのはついさっきなの。……上から見た限りでは、誰もいないみたいだった」

感情をそぎ落としたような声だった。村の状況を思い起こし、でも、なぜ謝るのが分からずに、彼は少女を見た。

「……どうして、謝るの？ 助けてくれたのは、君なのに」

「もう少し早く来ていれば、まだ助かった人がいるかもしれないと思つて。今更だけど」

彼女の言葉に、彼はようやく合点がいった。

優しい子なんだな、と思つた。他の人たちの死を、悼んでくれていたのだと分かった。

「ううん。ありがとう……助けてくれて。その…君は」

どうしてここに、と問いかける前に、少女が再びバスケットからぼんやり光る丸い水晶の玉を取り出したので、それに目を留めた彼は言葉を途切れさせた。ランタンではない。炎ではなく明るい白いそれはやわやわと静かな光を放っている。それで彼女の瞳の色が見えた。

綺麗な、きれいな、紫の色。

「私は、リサ。……あなたに会いに来たの。良ければ、名前を教えてくださいませんか」

続いて、カップのような容器に入った何かと匙を少女はバスケットから取り出ながら少女は名乗った。

自分に会いに来た？

その言葉を疑問に思いつつ、慌てて彼は名乗った。

「あ、僕は、レイン。本当はレイニールだけど、レインって呼ばれ

てる」

「そっか。じゃ、レイン。これ、お近づきのしるしに」

渡された容器の中には、黄色のものが入っていた。一瞬液体かと思っただけで、違った。ぷるぷるとしていた。

「すくって食べてね。プリンっていうの。おいしいよ」

勧められるままに、それを一口食べて、レインは目を見開いた。

「おいしい……！」

「でしょう？ あかね、食べながら聞いてほしいんだけど。私、魔族なの」

二口目をほおばった彼の手が、止まった。

魔族。おとぎ話の中にしか存在していなかったその言葉と、目の前の少女とは全くカケラも一致しない。かつて世界をずたにしたりという恐ろしい生き物は、封印されて魔界から出られないのではなかったのか。というかまじまじと少女を見つめて やっぱり綺麗でとても可愛い 彼はぽつんと呟いた。

「……そうなんだ」

そのあっさりさ加減に、少女は少し困惑したようだった。

「ええと……魔族ってどういうものか分かってる？ 結構怖がられているってきいたことがあったんだけど」

「分かってる、と、思う。でも君は……僕を助けてくれた。世の中には良い人も悪い人もいるって父さんは言ってた。だから君は、良い魔族なんだろ？」

「 違うよ。その、助けたのは、見返り求めてだし」

見返りの言葉に、彼は目をみはった。試しに頭に浮かんだ言葉を口にす。

「ええと……心臓とか？」

「違うよ！ あ、魂とかでもないからねっ。いらなから、そういうのじゃないからっ」

早口でぱたと手を振って少女が否定するので 可愛い

彼は、そうと意識したわけではないけど、微笑んだ。

「なんでもいいよ。僕にできることならなんでもする
本心からの、気持ちだった。」

何を望んでいるのか分からないけれど、子どもの彼にできることは多くないけれど、そう思った。だから。

「あ、その、ね。私のお家でお勉強してほしいの。あと、体を鍛えたりして、その……ゆくゆくは出世してほしいの」

告がれた言葉に、少しだけ拍子抜けした。

「君の家？」

「うん。魔界にあるから、人界……こちらには戻ってこれない。戻ってこられるのは6年後。それで、期間中は基本的に無給だけど、待遇は」

「いいよ。行く」

皆まで聞かずに、彼は断言した。少女はちょっと目をみはった。

「え……いいの？」

「うん。君と一緒になんだろう？」

「そう……だけど」

「住むところ、無くなつたし。だから」

彼は、少女を見つめて、言った。

「連れていって」

魔界がどんなところかは知らない。

けれど、少女と一緒にいられるのなら、それでいい。

出世したら、役に立てるといふなら、なんでもする。

「……ありがとう」

ちいさく微笑んで　可愛い　少女は手を差し出した。小さな、華奢な白い手。

彼はその手を傷つけないよう、そっと取った。

シグルドの場合

森の中は、真っ暗だった。

大陸北部に位置する針葉樹林の巨大な森。一年のほとんどを氷と雪で覆われるその地では、夏は短くあつという間に通り過ぎる。

そして今年の短い夏は、いつにもまして涼しく、実りは少なく、森の中の小さな村の小さな家の暮らしは、いつにもまして苦しくなつていった。

だから、彼は「森に還された」。

命は森からやつてくるのだと、彼の村では信じられていた。死者は森に葬られ、その魂は森に還るのだと。

「おまえは森に還るんだよ。この道をまっすぐ歩いていくんだ。いいいな？」

彼は黙つてうなずいた。先日気の利かない奴、と彼を罵った兄は、その様子に満足したようだった。

要するに、彼は捨てられたのだった。

幼い頃から、のろま、グズと言われ続けていた。

ほとんど口をきかず、ぼうつと遠くを見つめているような子どもだった彼は、閉鎖的な小さな村での鬱屈を晴らす為の生贄のようなものだった。父は酒が入ると時折彼を殴ったし、母の口癖は「なんであんたみたいいな子産んでしまったんだ」だった。兄も姉も彼を奴隷のように 彼はそんな単語は知らなかったが 扱った。彼はくちごたえはしなかったが、その行動が遅いときょうだい達は彼をなじつて、時には手をあげた。彼にとっては一生懸命だったのだが、

そんなことは関係なかった。

妹が生まれたが、娘ならば「売り物になる」可能性が高かったから、いじめられるのはいつまでも彼だった。

自分が悪いんだ、と思っていた。のろまでぐずでぐくつぶしのばかだから。だからぶたれるのだ。

仕方ない。

そう、思っていた。

学校などという大層な物はこの小さな村にはなかったから、彼は読み書きができなかった。もっとも、村の者のほとんどは読み書きができないので、どうということも無かったが、それでも森の獣の恐ろしさは、子どもたちはさんざん言い聞かされていた。

けれどその日、少しだけいつもよりいい服を着せられ、滅多に口にできない甘い菓子を少しだけ食べさせてもらった彼に告げられたのは、「おまえに森に還ってもらう」という言葉。

もう必要ないのだという宣告。

彼はぼんやりとそれを受け止め、頷いた。

仕方がないのだ。彼が役立たずだから。

仕方がない。

彼は言われたとおり道を歩きだした。

細い道はほどなく、枝と枯れ葉に埋もれ、やがて道ではなくなつた。

昼なお暗い森の木々の間を、村とは逆の方向に、彼はひたすら歩いた。

そのうちに日が暮れ、足下がおぼつかなくなっても、彼は歩いた。歩き続けた。履いていた革靴が、なんだかぬめって気持ち悪かったが、彼は歩いた。

けれど、その歩みは、獣の遠吠えで乱れた。

食べられてしまう。

彼は早足になった。そして、木の根に足を取られた。

太い根にけつまづいて倒れた彼は、起きあがるうとしたが、昼から歩き続けた体は言うことをきいてくれなかったし、飲まず食わずのため空腹は限界に近かったし、靴の中のぬめりが 酷使されて皮が剥けた足裏が痛くて、彼はうずくまった。

立ち止まった途端にすさまじい勢いで体の熱が奪われていく。北の冬は早い。汗ばんだ体が急に冷えていき、彼は身を震わせた。

また、獣が鳴いた。今度は、先ほどよりも近かった。

びくりと体を震わせ、息を殺し、彼は身を縮めた。

そうしながら、ぼんやりと思った。

どうして、食べられたくないんだろう。

必要ないといわれたのに。

痛いのが嫌だから？ でも、今すでに、彼の全身が痛みを訴えていた。もうどこが痛いのか、わからない。

消えてしまえたらいいのに。

固く閉じたまな裏に、それでも鮮烈な光が走ったのは、その時。

獣が「ギャンツ」と悲鳴をあげたそれに、彼は再び身を震わせた。苦痛の悲鳴に、聞こえた。

何だろう、今のは。

疑問に思った彼の耳に、次いで届いたのは、軽い着地音。そして「追い払ったよ。 大丈夫？」

きれいな、女の子の、声だった。

おそろおそろ目を開けると、青っぽい色のドレスが見えた。

そろそろと首を動かして見上げると、そこには柔らかい白い光に

照らされた　とんでもなく綺麗な少女がかがみこんで彼を見つめていた。

なんて綺麗な紫色の瞳。

「どうしてこんなところにいるかなあ……このあたり村っぽいもの無かったよ？　迷子？」

あきれたように問われて、彼はかぶりをふった。身を起こそうとして、やはりうまくいかず、震える彼を、少女はそっと抱き起こして、背中を支えてくれた。

柔らかい体。触れられた肩は温かくて。彼の知らない、甘い、香りが出た。

「……歩いて、きたから」

掠れた声で彼がそう言うと、少女はぴくりと身じろぎをする。

「……どうして？」

ゆっくりとつむがれた問いに、彼はしばし迷い、答えた。

「……森に還れって、言われた」

「……っ」

少女が小さく息をのんだ。綺麗な紫の瞳に剣呑な光がよぎり、途端、これまでにないほどのおぞげが彼の背を走り抜け、彼はぴくりと身をすくませた。それに気づいたのか、はっとしたように少女はかぶりを振って、ぼんぼんと彼の肩を優しく叩いた。

「あ、ごめん。あなたに怒ったんじゃないの。……どうして、そんなこと？」

「……仕方がないんだ。おれ……のろまで、ぐずで、ばかだから」

「……誰がそんなことを言ったの？」

再び彼女のまなざしが険しくなり、彼は身をすくめたが、彼の遅い返事をきちんと待ってくれる少女に答えなければと、懸命に言葉をつむいだ。

「……村の、みんなが、言ってる……」

「……みんなって誰と誰と誰」

少女の声が、先ほどからどんどん低くなっているのがとても怖か

つたが、彼は正直に答えた。

「とうちゃんと、かあちゃんと、にいちゃんと、ねえちゃんと……
となりのロブおじさんと」

「ごめん、もういい」

低い声でさえぎられ、突然ぎゅっと抱きしめられて、びっくりするあまり目を見開いて声を失った彼の右肩に顔を伏せて、少女は囁いた。

「言わなくて、いいよ。……本当に、みんな、なんだね」

深く息を吐く少女の体は、温かくて、心地よくて。でもその声は低くて、怖くて。相反する感情に、彼は非常に戸惑ったが、彼女は再びぼんぼんと彼の肩を叩いて離れた。離れてしまったのを残念に思った彼の表情を怖がらせたと思ったのか、彼女は困ったように微笑んだ。

「……ええとね、何度も言うけど、あなたに怒ってるんじゃないの」
「……じゃあ、どうして」

「はつきりいって、あなたの周りの人に怒ってる。……どうしてか分かる？」

しばし考え、彼はのろのろとかぶりを振ってうなだれた。

「……ごめん。おれ、ばかだから……分からない」

「あなたはばかじゃないよ」

きっぱりと、少女は言った。強い口調に、思わず顔を上げて少女を見上げた彼の目をのぞきこんで、真剣なまなざしで少女は続ける。
「ちゃんと私の質問に答えてくれるし、分からないことを分からないな
いって言えるもの。あなたはばかじゃない。ただ物を知らないだけ」
「……」

彼は、言葉を失った。

そんなことを言われたのは、もちろん、初めてのことで。正直、何を言い出すのかと思ったけれど、その強いまなざしが、怖いのに、すごく綺麗で、見とれてしまった。

「それにね あかね、私がどうしてここにいるか分かる？」

分からない。先ほどの会話を思い出しても、理由などは言っていないから、はず。

そう思って彼がかぶりを振ると、少女は胸を張った。

「うちのミアンの占術的中率はすごい。将来有望な子を探して出てきたのがあなた。だから、あなたが今は自分をばかだと思っても、これからきつと、すごく立派になっていくんだよ。もちろん勉強したりしないとならないけど」

彼は、目をしばたかせた。

将来有望？ 良く分からない言葉だった。けれど、これから立派になると言われて、彼は正直腰が引けた。うなだれた彼は、もごもごと口の中で呟いた。

「……でも、おれ……いらぬもの、だし」

「あぁもう」

苛立たしげな声にびくつと身をすくめて、嫌われてしまったかと不安になった彼はおそろおそろ少女を見上げた。

嫌われるのが怖いと思ったことなど、それまでなかったのに、少女には嫌ってほしくないと、思った。

見上げた彼の両肩を両手でつかんだ少女は、まっすぐな目で彼を見つめていた。

「あなた、名前は？ 私はリサっていうんだけど」

「……シグ、ルド……」

「ねえシグルド。……シグって呼ぶね？ さっきの答え。私、

あなたが必要だから、あなたを捜しに来たんだよ」

「……っ」

鼓動が、高鳴った。体が、かっとなつた。

走り回りたくなって、なんでか叫びたくなって。

喜びという感情の味と名を知らない彼は、息をするのも忘れて綺麗な瞳を見つめ返した。

「私と一緒に来てほしい。……今はまだばかでもいいよ、これからたくさん勉強すればいい。あのね、人は変わるんだよ、シグ。で

も、自分がこの程度だっと思ってたら、もうそれ以上にはいけない。だからこれからは自分がばかだからって言ったらだめ。シグは、自分はずっとばかそのままでもいいの？」

問われて、シグはかぶりを振った。ばかのままの自分は、少女にとっていらぬものになってしまふと思っただから、懸命に振った。

そうしたら、少女はようやく、にっこりと笑った。

なんて、綺麗なんだろう。

高鳴る鼓動のまま、彼はそっと少女の名を口にした。

「リ、サ」

熱い物が、胸を満たして。心の中で、彼は何度も彼女の名前を繰り返した。

「うん。なあに？」

「……どこに、行くの？」

「魔界の、私の家。ごめん、言い忘れてた。私、魔族なの。一緒に来るの、嫌かな」

「……魔界って、何？」

聞いた彼に、リサは少し肩を落としたようだった。

「そっか……やっぱりあんまり知られてないんだ……もっと怖がられてるかと思っただけ、違うんだ……」

「……あ、あの、ごめん。おれ」

ばかだから、と言いかけて、だめだと言われたのを思い出して口ごもる彼に、リサは苦笑して、言った。

「気にしないで。私もまだまだ知らないことがいっぱいあるってことだから。……魔界はね、人界　ここからは、少し行きにくいところだから、一度行ったらなかなか戻ってはこれないと思う。……それでも、いい？」

「うん」

はつきりと彼は頷いた。にこりと少女が笑うので、彼は温かくなつた。

「ありがとう」

言って立ち上がる少女につられて立ち上がるうとして、彼は痛み
にうめいた。

「どうしたの？ ……どこが、痛いなの？」

「……足の、裏」

「そういう大事なことはもっと早くに言って！」

少女はさつさと革靴をはぎ取り状態を確認 血塗れ すると、
手を器のような形にして、小さく何事かつぶやいた。すると少女の
手にみるみる水がたまっていくな。

「ちよっとしみるかも」

言いながらその水を彼の足裏に傾け、洗っていく。少し冷たくて、
けれど初めて見るそのわざには彼はぼかんと口を開けていた。そして
彼女が何か歌うようにつぶやいて彼に触れると、温かいものが全身
に広がり、痛みが消えた。

「じゃ、行こうか」

「……リサは、魔法使いなの？」

「うん、ちよっとだけね。靴は……置いていこうか。新しい用意
するから」

「……うん」

立ち上がると、少女はひよい、と彼の体に抱きついた。

「つかまって、目を閉じて」

「……ん」

温かい体。その体にそつと腕を回して、その感覚がひどく気持ち
よくて、彼はうつとりと目を閉じた。

シメオン＝アージエントの場合

薄暗い室内に、トゥルア三日月琴の音が響く。

内海に接したこの街は、年間通して比較的過ごしやすい気候であり、また大陸西部の交易の要所として自治都市として繁栄していることから、各国のお偉方や豪商などがこぞって別邸を建てていた。享楽と歓楽の街。そう呼ばれることもあった。

そんな街の享楽の一端を担う、高級娼館の一室。
訪れる客のために最高級のもがそろえられたその部屋が、彼の世界のすべてだった。

彼は今夜の客を待っていた。

さらさらとした長い銀の髪は、さながら上質の絹糸。日に灼けたことのないような抜けるように白い肌を覆うのは、透けるようなうすぎぬを幾重にも重ねたもの。彼の体の輪郭を諸処隠しながら浮かび上がらせるそれは、帯を解くと簡単に脱げるようなものだった。

豪華な寝台の上に座る彼の右足首には、金の足輪とそれにつながる細い金鎖、そしてその皮膚の上を這うように施された、薔薇の刺青。

白い肌に絡みつくようなそれは、妖しいまでのなまめかしさで見
る者を誘う。

異国の香が焚かれるその部屋で、彼は手すさびにつまびいていた
三日月琴から手を離し、テラスに降りる白い月影をぼんやりと眺め

ていた。

誰も来なければいいのに。

宵の刻は既に十過ぎ、新たに客が来るには遅い時間だ。真夜中の刻を告げるまでに誰も来なければ、今夜は彼は静かに眠れる。秋口に入りかけたこの時期は、社交界が華やく時期でもあり、そうなる
と彼の客は少なくなる。

賢姫と呼ばれる高級娼婦であるならば、貴族の同伴などで社交の場に呼ばれることもままあるが、彼のような子どもを、しかも少年を夜の相手にするというのは、一般的には眉をひそめられる行為であり、それにより、彼はこの娼館で大切に、嚴重に困っていた。彼を求める者たちの金払いはたいそうなもので、一晩に金貨千枚が動くことも珍しくなかった。

そんな客の顔も名前も、彼は知らない。

客が来る前に、いつも目隠しをされるからだ。それが客の訪れをあらわすサインで、彼の心を重くしたが、はずしてほしいとは思わなかった。

目隠しをしていれば、何も見ないですんだ。相手の顔だけでなく、自分が何をされているか見ないでよかった。与えられる痛みにこぼれる涙も、吸い取ってくれた。

シメオン、可愛いシメオン。

ねっとり囁かれる声の主の顔など、見たいと思わなかった。名を呼ばれる度に、彼は自分の名を嫌悪するようになった。

望んで受け入れた境遇ではなかった。

彼の美しかった母親が病に倒れたために取られた処置だった。この娼館の賢姫だった母は、手厚い、不必要なほどに手厚い看護を受けた。その分の金を彼がかせぐように、と。

しかし治療の甲斐なく母は亡くなり、娼館の主は彼の人気に気をよくし、莫大な治療費を払えと告げた。

それが終わったら自由にしてやる、と。けれど彼は我慢できなかった。彼を縛っていた鎖である母は亡くなった。

逃げ出した彼は　しかしあっけなく捕まり、連れ戻された。

逃げ出すような悪い子には、仕置きが必要だね。

わずかに笑みを含んだような声で、その男は言った。

押さえつけられた台の上で、彼は、自分の右足首に光る刃物が埋められていくのを目の当たりにした。

泣き叫んでも、革の帯でできた拘束具は緩みもせず。

白い台に広がる鮮血と痛みに彼が気を失い、次に目を覚ました時、腱を切られた彼の右足からは歩く力は失われ、代わりに金の足輪と鎖が与えられていた。

けれど、終わりではなかった。

これは痛みをなくす薬なんだがね。

皮膚に針を突き立てられ、痛み在身悶える彼の目の前で、男は白い粉の入った小さな瓶を揺らした。

もう逃げ出さないと約束するなら、これを使ってあげよう。

彼は、泣きながら哀願した。

もう逃げない、と。なんでもする、と。

そして薬は与えられ、彼の右足には枯れない薔薇が咲いた。

逃げようとは、もう、思えなかった。

死にたいとは、何度も思った。

刃物は遠ざけられていたけれど、その気になれば、布で首をくく

ることはできたかもしれない。

けれど、怖くてできなかった。

失敗したら、次は何をされるか分からなかったし、興奮した客に首を絞められたときの苦しさを、彼は知っていた。

自分で死ぬことができなかったから、彼は、諦めた。
すべてを諦めて生きていた。

温暖な気候とはいえ、夜はさすがに多少は冷える。

けれど、開け放たれたテラスへの扉から見える白い光は美しく、彼はそれをつくづくと眺めた。

夜中に誰かが閉めに来るまで　それが、仕事をしなくてもよい証。

彼は黙って、真夜中を待っていた。

とん、と妙に軽い足音が聞こえた。

耳慣れないそれに、彼は、はっと息をのんでその方向　テラスを見た。白い光に照らされ、室内に伸びてくる黒い影。そして。

「こんばんはー」

若干ひそめられた、けれど美しい声と、月光に照らされて波打つ黄金色。

美しい女たちなら何人も目にしてきた。候補として育てられている少女たちも、美しい娘ばかりだった。

けれど、彼が目にしてきた中でも、その少女は最も美しかった。実のところ、彼の記憶の中の母親が、彼にとってこれまで一番美しいひとだったが、それよりもなお少女は美しかった。大人になれば、誰もが振り返るほどの美女になるだろうと確信させる、そんな少女だった。

室内に入ってきた少女は、右手に細い鎖のようなものを下げており、物珍しげにくるりと周囲を見回し、そしてすぐに寝台の上の彼に気づいた。そして、にこりとほほえむ。

「ごめんなさい。もう寝ていた?」

すたすたと近づいてこられ、彼は少し身じろぎした。なぜだかこの美しい少女に今の姿を 客を待っていた姿を見られたくなくて視線を周囲にさまよわせるが何もないので、仕方なくぎゅっと三日月琴を抱えた。

その姿をおびえているとらえたのか、少女は寝台に近づききる前に立ち止まり、再びにこりと笑う。が、その表情はすぐにいぶかしげなものに変わった。

「あれ……あなた、もしかして、男の子?」

彼は、顔を真っ赤にしつつも、小さく頷いた。

どうしよう。

恥ずかしくて、いたたまれなくて、たまらなかった。ぎゅっと目を閉じた彼に、そつと声がかけられる。

「怖がらないで、大丈夫。あなたを傷つけるためにきたんじゃないから」

その言葉に、彼は再びおそるおそる少女を見た。白く光る石が寝台におかれていて、それに照らされた少女は、やっぱり、すごく綺麗だった。そして、気遣わしげに彼を見ていた。

「あなたは……ここで、働いているの?」

答えたくなかったが、彼はためらいつつも頷いた。少女は彼と同じくらいの年齢のようだったが、彼がここで何をしているかを理解しているようだった。それが分かって、彼はますます身を縮こまらせた。恥ずかしかった。

「借金があるとか? 家族を人質にされて、脅されているとか?」

それとも、その……薬がもらえるとか?」

先ほどより少しばかり低くなった少女の声に、ぞくりと何かが背筋をはしり、彼はぶるつと震えた。

「借金は、ある。でも…母さんは、もう、いない。薬は……塗り薬とかなら、たまに……もらう」

たどたどしく答え、自分の体を抱いた彼は、少女に、頼んだ。

「あの……あまり、見ないで、ほしい……」

「ごめん。気が回らなかった、似合ってたから」

ぼろっとこぼれた言葉に、瞬間、目の前が真っ赤になった。彼は思わず叫んだ。

「似合いたくなんかないっ……！」

思わず琴を寝台に叩きつけ、目をみはる少女に背を向け、彼はぶるぶる体を震えさせながらも、叫んだ。

「嫌だ 嫌なんだ、嫌なんだよっ！ ここもあいつらも大嫌いだ！ やりたくなかった！ こんなことしたくなかった！ 僕は女の子じゃない、こんな服なんて着たくない！」

ほとばしりてたのは、ずっとしまいこんでいた気持ち。

「こんなところに……いたくない！」

目頭がひどく熱くて。こらえきれずに、彼は泣いた。

こんなことを言っではいけないことは分かっていた。

諦めていたのに。

どうしようもないと諦めていたのに。

「……じゃあ、ここから出ようよ」

静かな声と共に、彼の背中にはさり、と布がかぶせられた。

告げられた言葉に、彼の頭のどこかが冷える。

「……どうやって、さ」

「一緒にそのテラスから」

「……逃げられるわけない。ここの奴らは金持ってる。すぐに見つかってしまうよ」

「人界ならそうかもしれないけど 魔界には、なかなか追いかけられないと思うよ」

「……魔界？」

聞きなれない単語に、彼は、振り向いた。

そこには、静かに、まっすぐに彼を見ている少女。

「私はリサ。魔界に住んでる、魔族なの。で、今は協力者を探しに来てるの」

「魔族……って、そんな」

おとぎ話の話の中の存在だ、と思っただけだ。
彼の叫び声にも、未だ誰もかけつけてこない。

館の中で一番高いところにある彼の部屋のテラスは、そう簡単に
よじ登れるものでもなく。

余所の国には、魔法使いの学校があるという話を聞いたこともあ
るが、目の前の少女のような年齢でそこに入れるとは思えず。
身を起こし、彼は尋ねた。

「ほん、もの？」

「うん。あなたが望むなら、今すぐにも連れていける。ここ
じゃないところに」

少女はすつと身を屈め、彼の右足を捕らえる金鎖を、いともたや
すく引きちぎって投げ捨てた。シャラリという音が小さく聞こえた。

「あなたは自由だよ。一緒に来てくれるつもりがあるなら、名前を
教えて」

その言葉に、彼は、再び、ふいっと顔をそむけた。

「……言いたくない」

「どうして？」

「……>シメオンくは、弱虫だから」

だから捕らわれてしまった。受け入れてしまった。

彼が一番嫌いな、>自分シメオンく。

ややあつて、少女は言った。

「じゃあ……アージエントっていう名前は？ 銀ってどういう意味なん
だけど。あなたの髪はすごく綺麗な銀色だし、銀は悪い物を追い払
う力があるっていうから」

「どうか？ と問われ、彼は何度か口の中でつぶやき、こくりと
頷いた。

「うん。いい」

「良かった。……あと、泣かせたのは悪いと思うけど、あなたが可
愛くて、その服も今は、似合っていると思うのは一般的な目から見

た事実だから謝らないよ」

きつぱりと言い放たれたその言葉に、彼は少しむっとしたが、少女はあっさりと続けた。

「好き嫌いなくごはんを食べて、きちんと運動してれば、そのうち背も伸びて筋肉もついて似合わなくなるかもしれないけどね。だから、今は、の話」

瞬間そうなのか、と思った彼だったが、すぐにあることを気づいてうなだれた。

「……でも、僕、歩けない」

「え……どうして？」

「この下、逃げられないようにって、切られてから、うまく動かないんだ」

少女は黙りこんで、彼が示した足輪をその紫の瞳でにらみつけた。小さく何事かつぶやいてそれをむしりとり、縫合はなされているもののひきつれた跡にそっと触れる。

「……撤回するよ。ごめん。あなたが可愛いのは、あなたのせいじゃないのにな。……ちよつと、失礼」

横座りになった彼の膝を伸ばさせて、少女は傷跡に顔を寄せて。「……っ！」

小さな柔らかい唇がそこに触れた瞬間、彼の体に熱がはしった。

それとは別に、触れられたところから広がる優しいぬくもりに、こわばっていたものがゆるゆると溶けていくように感じ、彼はきゅ、と眉をよせた。

どうしよう。気持ちいい。

ややあつて 彼にしてみると非常に長く感じられたが、実際は数秒ではある 少女が顔をあげた。

「これで、歩けるようにはなると思う。でも、長いこと使ってなかったから、うまく歩くためには練習が必要になる……ごめん、嫌だった？」

真っ赤になった彼は、ふるふるとかぶりを振った。

「いやじゃ、なかった……」

むしろ、もっとと思ってしまうた。

その様子を少女は黙って三秒間眺め、ふ、と吐息のような苦笑を浮かべ、彼に白い手をさしのべた。

「じゃ、行こうか。立てる？」

「……うん」

シメオンからエージェントになった彼は、怖れずにその手を取った。

ウエインデルベルトの場合

光も差し込まぬ地下の牢獄に、予言の王子は囚われていた。

生まれた時に占者が告げた予言。

この王子の魔力は強すぎる。いずれこの国を滅ぼすでしょう。待望の王子の誕生に沸いていた王宮に走った衝撃は大きかった。彼を生んだ王の第二妃は、世継の母たる身から、虜囚に転じた。第二妃の身内からは、第一妃の陰謀だという声も上がったが、王子を見た占者たちは、こそつて青ざめ、かぶりを振った。

これは恐ろしい。人のものではありません。

そして生まれたばかりの赤子は、処分されるはずだった。

術者の一人が、言い出した。

城の地下に、封印の縛鎖がございます。これほどの魔力を持つ方を、ただ殺すのでは惜しい。封印でもって、国の護りの力となせばよろしいでしょう。

それはかつてこの世に栄えた魔導帝国の残り火。

封印に捕えたものの魔力を絞り取り、地脈を安定化させ、気象等も制御する、この国の至宝であり 触れてはならずとされていた物だった。

反対はあった。しかし、近年この国を悩ませていた旱魃が、彼らを禁忌に駆り立てた。

そして赤子は、封印に囚われた。

小さな魔術文字の連なりからなる縛鎖が赤子の全身に絡みつき、祭壇にあるくぼみに収まると、それまで何の反応も見せていなかったその背後の祭壇に、血管のように光が走り、それは脈打つように明滅を始めた。

そして祭壇が動き始めてほどなく、待ちわびていた雨が降った。術者たちは快哉をあげた。ついでとばかりに、赤子の母を祭壇に捧げた。

そして地下は再び固く閉ざされた。

戦をすれば、風が彼らの味方をした。

実は豊かで、民の暮らしをうるおした。

この国は、周囲の国を圧する強国へ成長していった。

何も飲まず、何も食わずとも、赤子は次第に成長していた。

成長すればするほどその魔力は強くなり、それを承知であるかのように祭壇は彼を育てているかのようだった。生かさず殺さず、絞り取る為に。

しかし、共に閉じ込められた母は、ほどなく狂っていった。

成長を続け、幼子になった彼は、母の言葉をいつしか理解するようになっていた。

おまえなど産まなければ。

あなたはわたくしの可愛い子。

ごめんなさいウェンデルベルト、わたくしがあなたを産んだばかりに。

おまえなど、生まれなければ。

神よ……どうかこの子だけでも助けて。

なぜわたくしがこんな目にあわなければならぬの。

時に彼女は彼を責め、時に彼女は愛するわが子の運命を嘆いた。目を閉じれば、城の術者の声が聞こえた。

すばらしい力だ。何故もつと早くに使わなかったのか。わが国を滅ぼすと言われたそうだが、とんでもないな。ありがたいことだ。

彼は、なぜ自分が捕えられているかを、理解した。けれど、何もできなかった。彼が力をこめればこめるほど、縛鎖は嬉々とするかのようにその封印の力を強めた。

彼は何もできず、脈打つ光の中で、壊れ続ける母の声を聞いた。

ある日、母の声が途切れた。

美しかった彼女は、しかし、未だ30にもならないのに、その髪は白くなりしおれ、肌はかさかさになり、眼窩は落ち窪んで 枯れていた。

そして、絞り取れるだけ絞り取った体に用は無いとばかりに、縛鎖は彼女から離れ、彼女の体は床へとくず折れ 二度と彼女は動かなかった。

それでも地下の扉は開かれず、彼は彼女の骸が腐っていくのを、その腐臭をかぎつつ、ただ黙って見ていることしかできなかった。

自分もいずれ、ああなるのだらうと、ぼんやりと思った。

時を知るすべは、彼女の骸の変化だけ。

他に見るものの無い彼は、それを見つめざるをえなかった。

彼女の骨が剥き出しになった頃、目を閉じて聞こえる声に、彼の名は無くなっていた。

絞り取られた彼の魔力の恩恵は、既に当然のものとなりつつあった。

そんな時だった。

固く閉ざされ、何者も入ってくることでできないはずの地下に彼女が現れたのは。

始めに見えたのは白い光。

何事かと目を見開いた彼は、それをまじまじと見つめた。

円柱状の籠のようにも見えたそれはすぐに消え、後に現れたのはまばゆい黄金　いや。

信じられないほど綺麗な、黄金の髪の少女。

「こんばんは……って、ちよつ、何これっ」

それは、久々に彼が聞いた、生身の人間の、声。

ざっと視線を周囲にめぐらして顔をしかめた少女は、しかしすぐに彼のそばに寄ってきて、紫の瞳を若干剣呑な感じに光らせて問うた。

「これは、あなたの意思じゃないよね？　不本意な状況だとみていいんだよね？」

彼は、その瞳の光の強さに少し脅えつつも、頷いた。それを受けて、少女は大きく頷いた。

「分かった。　今から壊すねコレ。　ちよつと目を閉じてて」

極めて平坦な声で言うなり少女は右拳を握り　彼の眼前で瞬時に、怖気が走るほどの強大な魔力がその拳を包み込み　金色のそれを振りかぶり。

「どいつもこいつも子ども相手に何やってんのもういい加減にしろっ！」

叫びつつ、彼の頭の左横、拳数個分のところにめり込ませた。

あまりのことに呆然としていた彼も、咄嗟に目を閉じる。

反応は　劇的だった。

轟音と共に祭壇がひび割れ、脈打ちは消え、彼を捕えていた縛鎖は溶けるように姿を消し、ふらりと彼は少女にしがみつくようによく折れた。少女は構えていた左手で、難なく彼を受け止める。

彼の知らない甘い香り。初めて触れた、温かさ。

　こんなに心地よいものだなんて、知らなかった。

そんな彼の体をしっかりと抱き支え、少女は囁く。

「……ちよつと寒いかもしれないけど、男の子だし……とりあえず、

外、出る。いいね？」

頷く間もなく彼を抱いて飛んだ先は、王宮の尖塔。

初めて、空を見た。

月を初めて見た。空の広さに、星の輝きに、心が踊った。その名前は分からなかったけれど、きれいだ、と思った。

風はほんの少し涼しかったけれど、少女のぬくもりがあるからなんといいことはなかった。

月明かりに照らされた城下の町も、白く巨大な城も、ここからは見下ろすことができた。

これが、外。

そして広がる世界よりも何よりも美しい目の前の少女は、何回か深呼吸をすると、騒がしくなりはじめた城内にちらり、と目をやり、次いで彼に視線を戻すと言った。

「……時間がないね。私はリサ。魔族なんだけど、人間の協力者募集中なの。よければ一緒に魔界にこない？ っていうか、来て。あんな所に置いておけない。あなたの名前は？」

「……ウエンデルベルト」

魔族ということに納得しつつ 先程の少女は正直とても怖かったので 初めて口にした自分の名は、少し違和感があったけれど。

「ねえ、ウエンデルベルト。……お願いよ」

見つめられて、囁かれて。

差し出された手は、白くて綺麗で。

「……うん」

震える手で、彼はその手を握った。

その日、運命の道は乱れた。

空虚な心を魔につけこまれ、闇の聖女となるはずだったもの。
復讐心にかられるままに、鮮血の傭兵王となるはずだったもの。
心を閉ざしすべてを呪い、沈黙の暗殺者となるはずだったもの。
色で惑わし囁きで揺らし、傾国の吟遊詩人となるはずだったもの。
禁忌の恋にその身を墮とし、滅びの王子となるはずだったもの。

彼らの未来は、未だ定まらず。

Check やったことを評価してみました

>協力者候補一覧<

メリスマル：黒い髪に藍色の目。とても可愛い。大きな神殿で聖女様と呼ばれていたけれど本人は否定。無理矢理祀り上げられていたと思われる。

レイニール：朱っぽい金色の髪に緑色の目。焼かれた村で大怪我をしていたところを発見。彼以外の生存者はなし。何者かの襲撃を受けたと思われる。プリンは気に入ってもらえた様子。プリンは偉大

シグルド：茶色の髪に鶯色の目。家族からも徹底した虐めを受けていた様子。自己卑下が著しい。森の中で発見。村から放逐されたと思われる。

アージエント：柔らかい銀の髪に水色の目。本名はシメオンらしいが本人がいやがるからつけてみた。娼館で発見。色気だだ漏れ。足の臍を切られていたので歩行訓練が必要。

ウエンデルベルト：黒い髪に金色の目。大きなお城の地下でよくわからん装置（魔力を吸収するような感じだった）に全裸で捕まっているところを発見。つかつかとなったので装置壊してきた。今は少し反省している。

がりがりと書いていた手を止めて、リサは大きく息を吐き出した。
「……改めてみるとひどいなこれ」

ちよつと自分を落ち着かせるために、今日連れてきた子どもたちの状況を書き記していたのだが、どう見てもみんなトラウマもちになりそうである。というか。

「うおおああああ」

ちよつと他人には聞かせられないうめき声を上げてリサは机に突っ伏した。

ごめんなさいすいません正直いろいろなめてました自分も結構痛い目見てきたと思つてたけど上には上がありました甘かったですすいませんマジすいませんごめんなさいごめんなさいごめんなさい。
い。

リサの思考はぐるぐる回っていた。

どうして彼らに白羽の矢がたつたのか。冷静に考えると いや冷静じゃない自信は山のようにあるわけだが 他に行くところがなかった子たちだ。その弱みにつけこんでしまった気がする。状況的にみて、選ばせる余裕もなかったし、何より自分が、あの子たちをあそこに置いておきたくないと思つてしまった。

「これは、ぜんぜんフェアじゃない」

つぶやくと、それは確信に変わる。

そう、フェアじゃない。洗脳したいわけじゃない。でもやつたことははっきりいつてひきょうものじゃないかな力いっぱい状況につけこんだよね結局自分の意志とおしたようなものだよね恩着せがましいよね！ うおおあああ！

煩悶するリサだったが、控えめなノックの音に、はっと顔を上げて表情を取りつくろつう。彼女のじいやに、リサはあまりみつともないところをみせたくなかった。嫌われるのがいやだから。

「……どうぞ」

入ってきたアーネストは、トレイにカップをのせていた。

「温めたミルクでございます。……嬢様、お疲れでしょうし、今日

はもうお休みになつてはいかがですか？」

「うん……ありがとう」

立ち上がる気にならずに頷くリサに、いつもは小さい卓の方に置くのに、リサのいる大きな机の方までアーネストはカップを持ってきてくれた。静かに置かれたそれに再び「ありがとう」というと、リサはそつと一口含む。

ほんのり甘くて温かいじいやの気遣いは、嬉しい。

「……ごめんなさい、じいや」

「何がでございますか？」

答える声も優しい。それに促され、リサは吐息をついた。

「……私、見込みが甘かったわ。またじいやの迷惑増やしてしまった。……でも、放っておけなかった」

3人目のシグルドを誘った段階で、もしかして、と思つたのだ。候補にあがつたのは5人。レインもシグルドも、彼女が迎えに行かなかつたら、翌日にはどうなつていたか分からない。つまり、残る二人も、そういう状況なのではないかと思つてしまい、探しにいかざるをえなかつたのだ。

そして、見つけて、状況を知つてしまったから。

目を閉じて、リサは今日目にしてきたことを思い出した。

大きな白亜の神殿の中を矢印は示していたから、ちよつとだけ飛んで、見つけたのは白い服の少女。黒髪をおかっぱにしたとても可愛い子だったので、「美少女！ なまびしょうじょ！ お姫様だ！」とかトリサは内心喜んだのだけれど、その藍色の目には始め何の感情も浮かんでいなかった。

名前を問うと、その瞳は揺れたが、そんな彼女が「聖女様！」と呼ばれたとき、びくりと体を震わせたのに、気づいてしまった。

明らかに、そう呼ばれるのを嫌がつていた。それなのに、大人たちは口々に叫んだ。

聖女。おそらくとても彼らの中では尊い存在なのだろうその重み

は、リサにもなんとなく想像がつくが、それをこの少女に押しつけている彼らが腹立たしかった。

魔族と名乗ったのに、全く間髪入れずにメリスメルは叫んだのだ。連れていって、と。

悲痛な、叫びだった。この子はここで、いったいどんな目に遭ってきたのだろうか、思った。

だから見せつけるようにさらっていくことにしたのだ。

「初っぱなから大物引き当てたな」位にその時は思っていた。甘かった。

地図があれば長距離跳躍はなんということもないけれど、細かいところは矢印頼りだ。空から探していると、煙があがっているのが見えた。そちらを示す矢印に従って飛んでいくと、焼け焦げた家々が見えた。慌てて速度を上げると、焼けた家の間に、血塗れになつた人が何人も倒れていた。全く、動く気配がなかった。

少し高度を下げてみると、煙に混じって、錆びた鉄の匂いが鼻をついた。家の扉は大きく開け放たれていて、何かを引きずったような跡が見えて。頭で理解していたはずの単語が、目の前の光景と一致しなかった。体が、震えた。

略奪。

漢字二文字のそれが、こんなに酷いものだとは、思っていなかった。探し相手が、本当に生きているのか、不安だった。丘の上で見つけたときは、本当にほっとした。

同時に沸き上がったのは、罪悪感だった。

もう少し早く来ていたら、他の人も助けられたかもしれないのに。それに、あんなものを目にした子が、心を壊しているんじゃないかと、心配だった。

見つけたレインは、朱っぽい金色の髪はぼさぼさで、右腕折れていて血と煤にまみれていて服は破けてぼろぼろで、本当に大丈夫だろうかと思っただけれど、受け答えはしっかりしてそれにもほっ

とした。けれど、それがいいことかは分からなかった。

泣いた跡が、見えなかった。

プリンをおいしそうに食べている姿はごく普通で、ちょっと思いがけない発想には驚いたけれど利発な子で、勧誘にもあっさりと言った。けれど、「住むところ、無くなつたし」と言つた彼の瞳の昏さが、痛ましかった。

彼が失つたのは、住むところだけじゃ、ないだろうに。

そして シグルドだ。

転移した先はただっぴろいタイガのような針葉樹林の森。明かりも無く人家も見あたらないのに、こんなところに本当にいるのかと思ひながら探した北の地の夜はひどく冷えるのに、彼はたった一人で深い森の中にいた。獣に囲まれて、間一髪くらいだった。

そして彼の口から、彼がこんなところにいる理由を聞いたリサは、瞬間、キレかけた。抑えていた魔力が漏れて、かなり彼を怖がらせてしまったのは反省している。

でも。

口減らし。貧しい村ならある話だとは頭で分かっていた。けれどもそれならどうして産んだんだとわめきたかった。苦渋の決断だったかもしれないと思おうとした。けれど、彼の口から出る言葉は、とても卑屈で。しかもそれを疑問にすら思っていない。おまけに、家族だけでなく、近所からもそんな扱いをされていて。自尊心をよつてたかつて奪い取つて、最後の仕打ちが、村を追い出すことなのか。

ちょっとぼうつとしたようなところがあるシグルド。けれど、彼が懸命に自分の問いに答えようとしてくれることは分かった。多分に同情だけど、彼をぎゅっと抱きしめるのに抵抗はなかった。彼の体は細くて冷たかった。そうしなければ、いけないと思つた。

ばかで居続けたくないという彼の言葉を聞いて、きっと大丈夫だと思つた。

そして、頭の隅をよぎった考えに、怖くなった。

他の二人は、大丈夫なんだろうか。

できるだけ急いで跳躍した先は、これまでと違った都市部で、矢印が示していたのは、白い館。

姿消しの結界をはりつつ、しばらく外から様子を眺めて、内部の声に耳を傾け、そこが娼館というものであると理解した。リサ本人は現世でも前世でも経験はないが、リサの家のどエロい用心棒がエロすぎるために、情事の様子は目撃したことはある。いやうつかりノックを忘れたリサもあの時はよくなかったのかもしれないが、いやいやあれは真っ昼間だったしやっぱり悪いのはエロいぜスだ。うん。ミアンは悪くない。

ということとは、そういうものの候補として育てられている女の子とかだろっかと思いつつ、しかし矢印が一番高い所にある部屋を示しており、まさかロリコン向けとかだったらどうしようぶつ殺すっていうか最中だったら本気でどうしようマジとどめさすかとぐるぐるしつつもそのテラスに降り立ち、中に入ると、少しくらっとするような甘い香りの中　寝台の上に人が居た。

一人だったのにほっとしつつ、どうみても極上の美少女なのにしかもやたらと色気のある　ちっともときめかない自分に疑問を覚えた。

おかしい、美少女なのに。

いやまてお前と言われるかもしれないが、メリスマルで覚えた高揚を全く感じないので、まじまじとその体を眺め、性別を問うと、男だというし。

どうやら自分は美少女検知センサー機能搭載しているんだなあはははと内心でリサは思っていた。そんなアホなことでも考えていないと正直暴れ出しそうだったので。

しかしいけないと思います。この子の色気はやばいと思います。悩殺されるダメ大人続出でも驚きません。女の子だったら傾国の美

女とかになりそうだななどと思いつつ、彼の枷となるものを聞いていたら、どうやら地雷を踏んでしまったらしく、泣かせてしまった。命の危険がすぐあるわけではないと、感覚が麻痺してしまっていたらしい。着飾っていようとなんだろうと、彼がされていることは間違いなく虐待で、彼がそれをどれだけ嫌がったか、痛々しい叫び声でもよく分かって。

新しい名前を欲しがると彼は、きっと自分自身をすごく嫌っているのだらうと分かったから、頭に浮かんだ名前をつけた。

触れられるのを嫌がるかもしれないから、慎重に。そう思っていたのだけれど、彼の足の腱は、傷つけられてから時間がたちすぎていて、既に体にそうと認識されている、治しにくい物だったから切り傷とか擦り傷のような、今受けたものについては比較的治癒もしやすいのだけれど　ミアンに言われた「息を吹き込むように」というイメージをつい実践してしまったのだが、真つ赤になつたその顔とただ漏れの色気に、彼にはすっかり護身術を身につけてもらおうと決意したものである。

そして5人目を探しに転移したのだが、大きなお城のあるその国は、魔力の流れがとても整然としていた。なんとというか、他の所よりも、ずっと、濃い感じがした。不快というほどではないけれど、そのあまりに整つたものには違和感を覚えた。そして流れの中心は、その大きなお城で、矢印の反応もそちらにあった。

もう嫌な予感しかなかった。

地下を示す矢印に従って、ソナーのような術で空洞を探し、そこに跳躍して　生まれて初めて嗅いだ、死臭。

ひどい、においだつた。

そんな臭いの中、直視もしにくい死体が床に転がるそのそばで、脈打つ光の元である祭壇のようなものに、長い黒髪の少年は捕らわれていた。彼の足下には白い布のようなものが落ちていたけれど、彼自身は何も身につけていなかった。

その身を祭壇に縛り付けている魔術文字は、昔魔導帝国というものが人界を支配していたという時にしばしば用いられていて、文字自身が力を持つというもので、あまりきちんと勉強はしていなかったが、読みとれた中であつたのは、「吸収」「捕縛」「封印」「調整」「飼育」　もう、確信できた。彼はこの祭壇に捧げられたのだ　死体が腐り骨がむき出しになるまでの間、いやそれよりも長く、そう、あの白い布が彼を包んでいたところから、ずっと、ずっと、ずっと！

人間の善性を無邪気に信じていたわけではなかった。水原理沙だつたころ、インターネットの中で、さまざまな負の面も目にしてきた。人間、残酷なことも平気でできる人はいるのだと、頭では分かっていた。

正しくいうと、頭でしか分かっていなかった。

よくある話だと言えるほど、リサは悟れなかった。

そして今日たまりにたまつたイライラをぶつけても全く良心が咎めないものが目の前にあつたので、遠慮なく八つ当たりをすることにした。あの整然とした魔力の流れがなくなつたらさぞかしこの国は混乱するだろうことはたやすく予想できるが、最大多数の最大幸福？　そんなことは知つたことではない。最小の犠牲？　されてから言ってみろ！

メインはこの祭壇、魔鎖はおまけ、接触による捕捉開始と推定

こつちが捕らわれる前に回路灼ききつて壊す。その意志のままに拳を握り、術を展開　発動タイミングは接触と同時、破壊力増加、衝撃伝播速度増加、衝撃指向性範囲限定、反作用軽減、衝撃緩和境界作成、カウンター保険に抗魔境界作成　実行！

実際にこれまで使つたことはなかったけれど、もしもの時の為に何度もイメージトレーニングをしていた近距離用攻撃は狙い違わず祭壇を破壊した。　盛大な破砕音を響かせて。

防音結界張るのをうっかり忘れていたことに気づいたのはその後で、しまったなーと思いつつ、魔鎖は消えたと息苦しいこの場か

ら早く彼を連れ出したかったので、ろくに返事も聞かずに転移して勢いで同行を承諾させた。

「すごく、強引でした。反省はしています。でも。」

「連れてきたことを後悔はしないし、しちやいけないと思ってる。でも、それもこれも、じいやがいるから大丈夫だっただけで思ってるからなの。……ごめんなさい、甘えてばかりで」

リサがアーネストを見上げると、彼は優しく目を細めて微笑んだ。「ようございますよ、嬢様。わたくしは嬢様に頼られるのが嬉しゅうございます。……あの方々は、嬢様のご友人として遇させていたたくつもりですが、よろしいですか？」

「……そうだね、友達になるようなものだものね。でも必要なのは、母親役かな……なったことないけど、がんばる……うん、がんばる」

「……母親役、でございますか」

実のところアーネストは、リサが連れてきた子どもたちが、洗って身ぎれいにしてみれば、いずれもタイプは違うものの、容姿が整ったものたちばかりだったので、まさか将来有望とはそっちの意味かと少々、もといやや、いやかなり心配だったのだが。

いらぬ懸念でしたかな。

そんな彼の内心は知らぬリサは、ミルクをこくと飲み干すと、礼を言ってもう寝ると告げた。アーネストは一礼して部屋を退出する。

扉が閉まった後、リサは机の引き出しから計画書を取り出し、接し方の部分に取り消し線を引いた。

・（修正）とことん甘やかす。

よし、と頷いてから、リサは首を傾げた。

「……甘やかすって具体的にはどうするものかな？」

まあいい。明日相談してみよう。

リサは計画書をしまつと、寝室に向かった。

Action 見直しして改善につなげましょう

「甘やかすって具体的にどうしたらいいと思う？」

リサのきわめて唐突な問いかけに、彼女の魔法の師であり友人でもあるミアンは、その白くて長い耳をぴくりとさせた。

「……いったい何があったってそういう話ができたの？」

困惑気味の表情もとても可愛らしい。れっきとした大人の女性であるにもかかわらず、可愛らしいという表現が似合う。そそられるのが庇護欲か嗜虐心かはとりあえずおいといて。

青みがかった黒髪に翠の目をしたミアンは、兎型獣人と夢魔の間に生まれた合いの子だ。ぴくぴく動く頭部にある兎型の長い耳と、服の上からでも隠しきれない豊かな胸とくびれた腰と形のよいお尻といったとても夢魔らしい素敵な体をしているのに、その表情に浮かぶのはちよつと困ったような、おとなしやかなもので、それが簡潔にいうと「とてもすばらしい」とリサは常々思っている。

簡潔に言わないとちよつと長くなるので割愛。

「ちよつと予定の見直しを余儀なくされたの」

リサの朝食の席、貴族の屋敷の食堂ほどの長さはないために、新しく運び込まれた長机が少々手狭に感じさせるものの、部屋の壁は白く明るく開放感がある。

5人分の銀器がクリームイエローのテーブルクロスの上に整然と並べられている横、これまでに使っていた4人掛け用のテーブルでリサとミアンともう一人は朝食をとりつつのミーティングである。アーネストは子どもたちの準備の為に席を外しており、ここにはいない。

体質としては夢魔寄りなミアンは、人間が食べるような食物摂取の必要はあまりないものの、アーネストがいれていったお茶を口に運び、考えた。

「……ええと、つまり、人間の子どもたちにそういう接し方をする、ということかしら？」

「うん。母親役をする必要があると思ったの」

こつくりと頷くりサに、ミアンはようやく小さく微笑む。

「じゃあ、抱きしめてあげるのがいいんじゃないかしら」

「うん……」

齒切れ悪くりサは頷いて、自分の体を見下ろした。

「……何か胸に仕込んだ方がいいかな」

ぼそりとつぶやいたら、二人の横で無言で朝食にかぶりついていた虎頭の獣人が盛大に吹き出した。とつさに展開した結界で自分とごはんとミアンをガードしつつ、リサは半眼で彼を見た。

「ゼス、きたない」

「……おまえがいきなり妙なこと言い出すからだろうが」

何度かむせた虎型獣人 この家の用心棒兼リサのもう一人の友人、ゼスの鋭い牙が覗く口元から発せられる低い声と、琥珀色の獠猛な眼差しは、人間だけではなく魔族の大人も震え上がらせるものだが、リサはむ、と膨れる程度だった。

「妙なことじゃないもん。おっぱいは母性の象徴だもん。私は抱きしめられるならミアンみたいな素敵なおっぱいの又シ希望だもん。とつてもふにふにで気持ちいいもん」

「それは完全同意するがおまえのナリでデカイ胸はおかしいだけだろうが」

「童顔巨乳の需要は高いと聞いたけど」

「自前ならな。だいたい俺は偽胸は許せん。がっかり感がハンパない。それくらいならはじめっから貧乳の方がまだいい。好みじゃないが」

「だまされたことあるの？」

「昔の話だ。今は俺はおまえの胸が大好きだから気にすんなミアン」

「私も胸だけじゃなくて全部好きだよミアン」

二人の会話を目を伏せて聞いて　正確には聞き流していた
ミアンは突然振られて真つ赤になった。

「せ、宣言しないのっ」

「……」

二人はしばし無言でにまにましつつそんなミアンを眺める。かたやミアンの知る限り一番美しい少女　ゼスと会話している様子を聞いていると、本人時々自分の性別を忘れている時があるようにも思えるが　、かたや獰猛な獣そのままの男で、外見で似ている部分など欠片もないのだが、こういう時の雰囲気は妙に似ているのだ。こほん、とわざとらしい咳払いをして、ミアンは問うた。

「そ、それより。アーネストさんから、結局5人連れてきたと聞いたんだけど」

「うん。男の子4人に可愛い女の子1人」

「予定より多くないか？」

「うん。……お手数かけますがよろしくお願いします」

神妙な顔になってぺこり、と頭を下げるリサに、ミアンとゼスはちらりと目を合わせる。

彼らの雇い主は、こういうところが少しずるいと思う。文句を言わせてくれない。　受け入れざるをえないではないか。

どさりと体を背もたれに預け、ゼスは手で顔をこすりつつ息を吐いた。

「……まあいいけどよ。人間のガキかー……マジで連れてくるんだもんなおまえ。俺ガキの子守なんざほとんどしたことないのによ。だいたい体術教えるって言ったのに甘やかすってどういうことだ？　撫でろってか？」

「その時は多少の怪我はしかたないよ。っていうかゼスに甘やかすのは期待してない。少なくとも自分の身を自分で守れる程度にしてほしい　それ以上になりたいって言い出したら別だけど。その時は遠慮なく鍛えればいいよ」

ただ、とりサは続ける。

「人間だから、獣人よりも体力的にはかなり弱いつていうのはあるんだけど、それ以上に、弱ってる子たちが多いから。初めのうちは、少し気を配ってほしい」

「……また結構な無茶言いやがる」

「無茶じゃないと思うけど？ 弱点見抜くのは得意でしょう。とどめさすんじゃないくて、そこで止める方にいけばいいんだよ」

あっさりとした口調で、リサは言った。彼なら当然できると確信しているといった感じのそれに、ゼスは胸の内ですみ笑する。まったく、俺を動かすのがうまいもんだ。

おもねるでも媚びるでもなく、あくまでさりりとリサは彼への高評価を示す。かといって、そこに利用してやるうという意識はなく、事実リサは頭ごなしに命令などしない。

正直なところ、ゼスは今回の計画はリサの暇つぶしととらえている。しかし、まあ付き合ってるかと思う程度に、彼は小さな雇用主のことを気に入っていた。かつて名うての魔獣ハンターで、魔界を気の向くままに巡っていたきわめて気まぐれな彼が、用心棒という名目でこの家にいる理由は、半分以上は彼のミアンがリサの先生であるためだが、残りの一部にはリサ自身の存在もあるわけだ。

肩をすくめてゼスが了解の意を示してやると、リサはにこ、と笑って次いでミアンを見る。

「まだ、字がかけるかとかは全員にきちんと確認していないけど、話す方は少なくとも三人は問題ないと思う。個人差がかなりありそうだから、手分けして教えていく形の方がいいかもしれない」

「分かったわ。……うまくできるか、分からないけど」

「ミアンの教え方は上手だよ」

にっこりと笑うリサだが、ミアンの意見は違う。リサの呑み込みが良いのだ。理解力の高さと真摯さと貪欲なまでの知識欲がそうさせているのだと、ミアンは知っている。

ついでにいうと、リサはなぜか初対面の時からミアンに対してとても懐いてくれた上、出力全開な大好きオーラをミアンに対しては

出しまくっているので、非常に甘い採点だろうと思う。

表情をひきしめて頷くミアンに、リサは苦笑した。

「緊張しなくても大丈夫だよ、ミアン。いつもどおりにやってくれればいいんだから。……無理をしても後でボロがでてくるだけだから、うん、いつもどおりで」

「……おまえそれ自分に言っていないか？」

「やかましいよゼス。責任者は私なんだもん仕方ないでしょう」

凶星をさされて、少しほおを赤らめて早口になるリサに、ミアンは思わず笑みをこぼした。

「やれるだけやってみるわ。がんばりましょ、リサ」

「うん。がんばる」

こくと頷いて、リサはスープを飲み干した。

それを合図に、ゼスも再び食事を再開し、ミアンはもう一口お茶をすすするが。

「……できれば、子どもを育てる予行練習だと思ってやってみてくれるといいんじゃないかと思う」

ぼそつとリサがつぶやいた言葉に、ミアンはお茶を吹き出しそうになりあわてて口元を押さえ、ゼスは今度は吹き出しはしなかったものの、変なところに入ったのか激しくむせた。

「おま……おまえな」

「からかってないよ。本音だよ。二人の子どもならきつと可愛い。

……でも子どもたちの目とか耳に触れそうな場所で昼間っからはやめておいて、するならちゃんと言葉をかけること。特にゼスっ」

リサの言葉にそういう意図かよ、と半眼になるゼスの前で、ミアンは頬を赤らめつつこくと一生懸命に頷いている。分かってんのかミアン、リサは音出さないようにして鍵かけるなら昼間からでも構わんって言ってんだぜ？

半夢魔なのに恥ずかしがりで生真面目な恋人のそういうところもゼスはそれなりに気に入ってはいるのだが、いかんせん昼間だと抵抗が長い。

まあ分からせるのは後でいい、とゼスは鷹揚に頷いた。

「分かった。気をつける」

「そうして」

言って、リサは厨房から料理の載った皿をぴこぴここと運んでくるアーネストのサーヴァントを見た。サーヴァントとは半自動の人形のようなもので、彼の手足となつてこの家の雑務を担当している。

黒髪に猫耳、メイド服な彼ら　一応女性型だから彼女ら？　の

身長はだいたい60cmほど、布製のように見える顔には、くりつとした黒い目、それだけがある、まさに少女メイド型人形。ミトンのように親指だけが独立しているお手てとぴこぴここという擬態語が似合う動き方のとても可愛い子たちだ。

ちなみにメイド服のスカートの下にはご丁寧に穴あきぱんつと猫しっぽもついていることを確認した　仕方がないではないか、猫耳つきなのにしっぽがないなんて許されることではない　リサは、その完璧さ具合に軽く戦慄したものである。

ちなみにその2、「この子たちがこういう姿なのは、じいやがそうしてるの？」と勇気を出して尋ねたりサに、アーネストは目を細めて「お気に召しませんか？」と訊き返してきたので「ううんとても可愛いから気に入ってる」と返事したところ、「それはようございまして」とだけ微笑んで言われてしまい、それ以上深くは突っ込めなかった。

閑話休題。

「準備できたみたいね」

ほかほかと湯気をたてている皿がぴこぴここと並べられていくのを見て、リサはくいつとお茶を飲み干して。

「さ　始まりだ」

極めて慎重な口調で、宣言した。

初めてだらけの一日目

目が覚めると、そこは知らない寝室だった。

神殿の硬い寝台とは全然違うふかふかの寝具から身を起こし、メリスメルは周囲に目をやった。

窓にはカーテンがかけられているが、そこからは柔らかい光がちらちらと漏れており、きつと今は朝なのだろうとぼんやりと考える。床は落ち着いた茶色っぽい色合いの毛足の長い絨毯が敷いてあり、ベッドの横にちょこんと優しいピンク色の布靴が置いてあった。よいしょとベッドから滑り降りると、絨毯もふかふかでびっくりした。布靴に足を引っかけようとすると、自分の足とスカート部分を目にするわけであり、メリスメルは自分の体を見下ろした。

なめらかで柔らかい、淡いベージュの夜着。着替えた覚えはないけれど、それに不安になるよりも、これまで着たことがない、その手触りに、彼女はしばし見とれた。そろそろと腕をさすってみる。

すごく、気持ちいい。

胸元にはギャザーの脇にフリルがあつて、とても可愛らしいその服に、メリスメルは小さく感嘆のため息をついた。

これまで着せられてきた服とは、全然違う。

と、響いたノックに、彼女は小さく身を震わせた。

「ど……どうぞぞ？」

「失礼いたします」

言っに入ってきたのは、優しそうなおじいさんで、彼は彼女に「礼すると言った。」

「おはようございます、メリスメル様。わたくしは当家で嬢様の側仕えを拝命しております、アーネストと申します。どうぞそのようにお呼びくださいませ」

じつと聞いていた彼女は、耳慣れない言葉に首をかしげた。

「嬢様？」

「おそらく、メリスマル様には、「リサ」とお名乗りかと存じますが」

メリスマルは息をのんだ。

リサ。 彼女の名前を呼んでくれた、綺麗な、綺麗な少女。彼女を神殿から連れ出してくれた少女。

人界から魔界へと行くときは、少し体に負担がかかるから、眠っていた方がいいと言われ、目を閉じたところまででメリスマルの記憶は途切れているが、本当に リサは存在していて、彼女を連れてきてくれたのだ。多分、リサの家に。

「リサに、会えますか？ お礼、言わないと……」

「その前に、お召し替えをなさいませんと。 どうぞ、こちらを」

アーネストの後ろから、ぴこぴこと、人形？ のようなものが進み出て、大きな水の入ったポウルを小さな台の上に置く。その隣には別の人形がぴこぴこと進み出て、タオルを手に待機していた。

顔を洗えということだと判断し、メリスマルは小さな台に近づいた。少し温めのそれは、楔ぎの水とは違う。

洗い終わると、人形がぴこぴことタオルを差し出ししてくれるので、礼を言つてそれを受け取った。顔をうずめ、柔らかさに目をみはる。

さらに用意されていたのは、水色のワンピース。白い丸襟のついたそれには茶色いすべすべの前ボタンがついていて、シンプルな形であるけれど可愛い。手渡されたそれを声なく見つめていたメリスマルに、アーネストは穏やかに声をかけた。

「着替え終わりましたら、食堂へお越しく下さい。嬢様がそちらでお待ちです。 この者に、声をおかけください」

ぴこ、と進み出た人形の肩からは、「案内係」と書かれたタスキがかけられていた。

では、と立ち去りかけるアーネストに、メリスマルは慌てて頭を下げた。

「あの……ありがとうございますっ」

「わたくしに礼など不要でございますよ、メリスマル様」
振り返ったアーネストは、穏やかに告げる。

「あなたがたをお招きしたのは嬢様でございます。そして嬢様はあなたがたをご友人として遇するおつもりようです。今後、こちらに滞在していただきませうゆえ、何かとわたくしがお世話をする機会もあるとは存じますが、どうぞ、お気を楽になさってください」
そういうものなのか……と思ったが、彼女は、聞きとがめた言葉を口にしました。

「あなた、がた？」

「はい。あなたを含め5人、他の四方は男性ですが。協力者候補としてお越しです」

「……そうなの……」

ひとりじめできるわけじゃ、ないんだ。

ほんの少し、残念だった。けれど、小さく頭を振ってその思考を追い出した。リサは言っていたではないか、「協力者を探している」と。

気を取り直して、メリスマルはぺこりと頭を下げた。

「あの、これからよろしくお願いします、アーネストさん」

「はい。こちらこそよろしく願っています」

アーネストが出ていったので、メリスマルは服を人形から受け取った。けれどボタンつきの服は久しぶりすぎて、上からかぶった方がいいものの、少しもたもたとしてしまう。

物言わぬ人形たちは黙ってその様子を見ていて、少し焦っている。彼女の足に一体がびこびここと触れ、ふるふるとかぶりを振る。ゆっくりとボタンを留める仕草をするその人形にあわせ、周りの人形がこくこくと頷いた。

「あわてるな、ってこと？」

こくこく。一斉に頷く人形たちに、メリスマルは思わず頬を緩めた。

「ありがとう」

ぐつ、と人形たちは小さな親指を立ててそれに応える。

ボタンを全部留め終えると、膝丈までの靴下が運ばれてきて、壁際の、何か布がかかっている台の前にある椅子を示されたので、そちらで履く。そして、何かクリームのようなものを顔などにぺたぺたと塗られ、ブラシで髪をといてもらった。それが終わると、人形はびこびここと2体台上り、そこにかかっていた布を左右から引つ張った。

そこに映っていたのは、びっくりしたように目を見開いた、黒いおかつぱの女の子で、自分だということは分かったけれど、記憶の中にあるよりもずっと可愛らしく、お嬢様のように見えた。

立ち上がってくるっと回ると、ワンピースはふわりと円を描いて揺れる。　すごい。

そんなメリスマルを、人形たちはびこびここと拍手もどき　音がぼすぼすとしか出ない　をして、次々にぐつと親指を立てている。誉めてくれていることが分かったので、「ありがとう」と言いつつ、メリスマルは真似をしてぐつと親指を立ててみた。すると人形たちはびこびここと飛び跳ねだした。ハイタッチなど繰り出しつつ、どうやら喜んでいようである。

笑みを浮かべてそれを見下ろすメリスマルに、案内係の人形が近づき、首を傾げた。リサが待っていることを思い出し、メリスマルは言う。

「案内、お願いします」

こくと頷き、案内係は歩きだした。

メリスマルはその後について歩きだした。

廊下に出て、赤い絨毯の敷かれたそこを歩いていくと、吹き抜けになったところに出た。見下ろすとかなり広めの大広間のような下以降りる階段の側に、彼女と同じ年頃の子どもが3人いた。それぞれ案内係と書かれた人形が横にいるから、彼らが他の「協力者候補」なのだろうけれど。

何故か、朱っぽい金髪の子と、銀色の髪の子が、にらみ合いをし

ている　　というより銀髪の子が、相手をにらんでおり、金髪の子が困ったような顔になっていた。メリスマルを見ると、はっと表情を変えるが。

彼らは一様に、動きやすそうなシャツとカーキ色の長ズボンといういでたちだったのだけれど、振り向いた長い銀髪の子は、リサとはまた違うけれど、とても綺麗な子だった。ただしものすごく不機嫌そうだが。

「あ……君が、女の子なのか」

金髪の子が、笑みを浮かべる。その言葉に、銀髪の子が腕組みをしてフン、と鼻を鳴らした。

「そうだよ。僕は男だ」

「しかたないだろ!?　そうは見えなかったんだからっ」

「そういうのを節穴っていうんだ」

なんとなく、険悪な理由が分かったメリスマルは、そばでぼつっとしている茶色の髪の少年に、とりあえず、あいさつした。

「あの……はじめまして」

「……はじめまして」

少し間があいたのを不思議に思うが、それをきっかけに向こうの二人は口論をやめ、メリスマルと茶髪の少年に向き直る。

「……はじめまして。僕は」

「ハジメマシテ。お前の名前なんかどうでもいいよりサが待ってる。早く行こう」

ぴしゃりと遮る銀髪の子に、さすがにきつと金髪の子は厳しい視線を向けたが。

「　　いかなさいましたか皆様?」

穏やかな声をかけられて、ぱつと4人はそちらを振り向いた。そこには、アーネストと、彼に手を引かれて歩く、3人の少年たちと同じいでたちの、長い黒髪を緩い三つ編みにした、少年。

彼がきつと、5人目。

「さ、参りましょうか。　　ウエンデルベルト様、こちらが、一緒

に勉強する方々です」

「一緒、に？」

「さようでございます」

彼の表情のない金色の目が、メリスマルたちを見回す。なんだかそれにぞくり、と背筋が震えるのを感じて、メリスマルは息をのんだ。

その感覚をおぼえたのは彼女だけではなかったらしく、声を無くしたかのように他の3人も黙っている。が、ややあって、茶色の髪の少年が、小さく言った。

「……なんか、リサ、みたいだ」

「え？」

一斉にメリスマルと、金髪銀髪両少年が彼を見る。

「どこが」

銀髪少年の妙に不機嫌そうな声に、茶色の髪の少年は困惑したような表情で黙り込んでしまう。

と、そこに穏やかな声がかかった。

「もしや シグルド様は、嬢様がお怒りになっているところをご覧になったのでしょうか？」

「……うん。おんなじ、感じがする」

「お前リサ怒らせたのっ？」

銀髪少年がさらに険悪な声を出すが、シグルドと呼ばれた彼はぶるぶるかぶりを振った。

「……ち、がうつ」

「じゃあどこが似てるっていつのさ」

苛立たしげな銀髪少年の声に、しかし答えたのは茶色の髪の彼ではなくて。

「魔力かなー。とりあえず皆、降りておいでよ」

子どもたち4人は、ぱつと声のした階下を見下ろした。ウェンデルベルトだけは緩慢に、その声の方を見る。

「リサっ」

真つ先に駆け下りていくのは金髪の少年。茶髪の少年が無言でその後に続き、銀髪の少年は少し悔しそうに表情を歪めてゆっくりと階段を下りていく。右足をかばうように。

メリスマルは、そつとその横に並んだ。

「あの……走れないの？」

「……うん。練習したら、走れるようになるって言ってたけど」

「怪我、したの？」

「……そんな感じ」

そんな会話を交わす二人の後ろを、アーネストとウェンデルベルトと呼ばれていた少年は、同様にゆっくりと下りていく。

「これは、階段というものでございます」

「階段……」

「そして、あなたのそちらの手　空いている方にあるものが、手すりというものです」

「手すり」

一語一語、アーネストの言葉を繰り返す少年の声を背中に聞きながら、メリスマルは不思議に思った。この中では一番小さいみたいだけど、まるで本当に小さい子どものようなようだ。

階下からは、金髪の少年の声が響く。

「リサ、なんであんな意地悪い奴選んだの!?　銀色のっ」

名指しされた銀色の眉は当然ながらぎゅっとしかめられた。けれど。

「レイン、あの子女の子扱いしなかった？」

「……した、けど」

「その後謝った？」

「……まだ」

「じゃあ、どうしたらいいと思うっ？」

「っでも、そんな、たいしたことじゃっ……」

「レイニール」

静かともいっていい口調なのに、その響きは聞いていたメリスマ

ルの息をものませる程の強さで。

「大事なものは人それぞれ。嫌なこと、ね。……あなたが大したことじゃないと思っても、他の人はそう思わないこともある」というのは、分かる?」

「……うん」

「じゃあ、どうする?」

しばしの沈黙。階段を下り終えたメリスマルと銀髪の少年に目を向けてきたレインというらしい少年は、つかつかつかと歩いてきて、二人の前でがばつと頭を下げた。

「ごめん。僕が悪かった」

「……いいよ。僕も、言い過ぎた。ごめん」

言いながらも、銀髪少年の視線はまだかなり険しい。

何故ならリサには、シグルドがべったりと抱きついているのである。正直、メリスマルも面白くない。なので、銀髪少年を支えていた手を離し、小走りに近づいて、リサに抱きつくことにした。

「おはよう、リサ」

「おはよう、メリスマル。とても可愛い、よく似合ってる。よく眠れた?」

するりとシグルドの手をほどいて、メリスマルの体を抱き返してくれるリサが嬉しくて、メリスマルは微笑んだ。

「うん。ありがとう、リサ」

するとリサがとろけるような微笑みを浮かべる。ときどきと胸が高鳴るようなそれに、メリスマルはしばし陶然と

見入った。煌めく紫水晶の瞳から、目が、離せない。

数秒の沈黙を破ったのは、アーネストの穏やかな声だった。

「嬢様?」

「ああ……ごめんなさい。おなか空いているでしょう? こっちは食堂なの。ついてきて ああ、案内係ごころうさま。次のお仕事よろしくね」

リサの言葉に、メリスマル達についてきていた4体の人形は、し

ゆびつと片手を上げると、ぴこぴここと走って一斉にどこぞへと去っていく。

見送るでもなく、リサはすっと動いて、メリスマルの後ろで固まっていた。リサが動いた方向を見たからメリスマルも気づいた。銀髪の少年の手を取り、彼の顔をのぞき込む。

「おはよう　大丈夫、アージエント？　足、痛い？」

「……まだ、大丈夫」

ほんのり顔を赤らめて答える銀髪の少年　アージエントは、見ていたら落ち着かなくて、どうも見ていたらいけないような気がしてきて、けれど目を離すわけにはいかない気がして、メリスマルは困惑した。

そんな彼女の前で、リサは「……無理、しないで」と言いながら、彼の腕を取ってゆっくりと歩き出す。そして、アーネストの側に行くと、彼に手を引かれているウエンデルベルトに微笑みかけた。

「おはよう、ウエンデルベルト。　おはようっていうのは、朝のあいさつだよ」

「おはよう、リサ。……朝？」

「うん。目覚めるとき、お日様が昇るとき、昼の始まるとき、夜の終わるとき。　後でお日様を見に行こうね」

「うん」

ゆっくりと、歌うようなリサの言葉にこくりと頷く黒髪の少年ウエンデルベルト。

やっぱり、言葉を知らないのだ、彼は。

メリスマルの胸に下りてきたその事実には、沸き上がるのはしかし、哀れみではなく、疑問だった。

どうやって、彼は、大きくなったんだろう。

周りをそつとうかがってみると、レインもシグルドも、不思議そうな顔でウエンデルベルトを見ていた。

「じゃあ、行きましようか」

そんな空気をさらっと流し、リサはアージエントを促して歩きだ

す。

メリスマエル達は、それに続いた。

食堂の机の上に並べられた皿には、色とりどりの野菜のサラダと黄色と白がきれいな目玉焼き、その下にはカリカリのベーコンが敷かれ、湯気のたつていているきれいな黄色のスープに、こんがりキツネ色に焼かれた表面がすすべした丸っこいパンが小さな籠に盛られていた。

ただし、四人分。

「さ、どうぞ。冷めないうちに食べて。ちなみにうちの食前のあいさつは、いただきます、だよ」

右からレイン、シグルド、アージエント、メリスマル、ウエンデルベルトの順に並んで席に着いたのだが、ウエンデルベルトの席の前には、緑色の器に入った白いものだけがぽつんと置かれているだけで、彼は右隣　メリスマルと彼の間の小さな椅子に座っているリサに金色の眼を向けた。

「いただきます」

素直に言っただけで食べ始めるレインに続いて、他の面々も口々に「いただきます」を言っただけで目の前の食事に取りかかるものの、自分達とウエンデルベルトの前の差が気になるようで、ちらちらと視線をよこしている。

そんな中、リサは緑色の器と匙を手にとると、白いぷるんとした中身のそれをちよつとだけすくった。

「これはミルクゼリー。ウエンデルベルトは初めてのごはんでしょう？　胃とか内蔵これまで全然使ってなかったところにいきなり普通のもの食べたら、普通の人間はおなかが痛くなったりするの。」

ちなみにここがおなか

ぼんぼん、と優しく触れられて、ウエンデルベルトは頷いた。音としての知識はあるものの、それが何を示しているのかということ、がほとんど分からない彼の状況を、リサは理解してくれているので、

こういつた風に説明を交えて話をしてくれる。

すつと唇をなぞられ、「これが口ね。……開けて」と言うリサに従い、口を開ける。そこに匙が入られる。匙の冷たい感覚、次いで柔らかい、何か。

「で、これが舌、これが歯。そして多分今あなたが感じている感覚が、甘い、っていう、味」

ちよんちよん、と匙が彼の口の中に触れていき、じわりと湧いてくる何かが口からこぼれそうで、彼が口を閉じる直前に、すつと匙が引き抜かれる。

「今出てきたのが唾液。で、ゆつくりと、舌でゼリー……今食べたものを動かしてみて」

頷いて、彼は言われるとおりに舌を動かしてみる。ちょっとしかなかった柔らかいゼリーは、しかし、すぐに口の中で溶けてしまう。ごくくんとそれを呑み込んで、ウエンデルベルトは言った。

「甘い」

「うん。じゃ、もう一度　上の歯と下の歯を合わせてみて。そうそう、上手。で、口を閉じながらそういう風に……よくできました、それが噛むっていうこと。次はよく噛んでみようね」

先ほどより大きなたまりが口に入れられるので、彼はがんばって噛んでみた　すぐに消えるが。

「無くなる」

「柔らかいからね。でも、噛む力は大事だから　皆、ちゃんと噛んでる？」

くるりと後ろをリサが向くと、一様にウエンデルベルトをうかがっていた四人が、ごくごく頷きながらもぐもぐと口を動かしている。「ちゃんと噛まないんだめなんだよ。顎が細いと大きくなったときに歯並び悪くなっちゃうし、噛めば脳が刺激されて　ええと、賢くなるための準備になるんだよ。脳っていうのは頭の中にあるものことね」

「……そうなの？」

問うたのはシグルドだ。リサはウェンデルベルトにもう一口を与えつつ頷く。

「そうだよ。一口30回位で噛める位の量を口に入れて食べるのがいいらしいよ」

「さんじゅっ……」

「うん。みんな、カード準備」

リサの言葉に、どこからかぴこぴこぴここと集まってきた人形達。小さな手には文字の書かれたカードをよいしょとばかりに持っている。そして自分達の背後にカードを何枚か積み上げて長机の前にぞろっと整列すると、一番左側の人形がぴこ、とカードを持ち上げた。そこに書かれているのは、「1」を示す文字。

「あれが、1。次、2」

ぴこ、と「2」を示す文字のカードが上がり、「1」のカードは下げられる。ウェンデルベルトだけでなく、全員それを注視していた。リサは次々と数字を上げていく。

「10。はい皆、手止まつてるよ？ 一口食べて、もう一度1から数えてみるね　さん、はい」

ぴこぴここと上下するカードと一緒に口を動かし、10を3回繰り返して、ごくんと呑み込む。「スープが冷めるから先に飲もうか」とリサが言うまで四人は無心に30回噛みを繰り返した。ウェンデルベルトもかなりがんばった。リサが匙を渡してくれたので、こぼさないように気をつけつつ口に運ぶ。そうしながら、言われる数とカードの文字を頭に刻む。

「じゃあ次は30まで数えていくよー」

11以上は文字の数が増えた。けれどそれは規則的なもので、2、3回もすると覚えることができた。そのころにはウェンデルベルトの器は空っぽになっていたので、リサはにこ、と笑って彼の頭を撫でて、言った。

「じゃあ次、ウェンデルベルト、数えてみて。　カードシャッフル」

彼は頷き、人形たちはぴこぴこことカードを持ってその位置を入れ替えた。

「1」ぴこ「2」ぴこ　彼のカウンントに合わせて人形達がカードを上げ下げする。そして、ウエンデルベルトが「13」と言うのと、ぴこぴこ、と2枚のカードが上げられた。リサは、彼女に近い方の手を取り言う。

「こつちが右、そつちが左。あのカード、正しいのはどつち？」

「右」

彼の答えに、人形達はカードを手放し、全員で拍手もどきをした。「よくできました」とリサも微笑んで撫でてくれるので、彼は真似をして口の両端を上げてみた。

そんなクイズを全員に当てておこない、次に出されたカードが何の数字か当てていくクイズをおこないつつ、初めての朝食はつつがなく終わった。

ウエンデルベルトのおなかは痛くはならなかった。次は皆と同じものが食べれそうだね、とリサは微笑んでくれた。

食後、全員で歯磨きの仕方とお手洗いの使い方を教わった。レインは「リサもトイレするの？」と思わず訊いてしまい、リサは「するよ」とあっさりとは返答した。が、実のところ彼女ら魔族の消化吸収機構はリサにとってかなり謎で、はっきり言うと、人間と同じく排泄のための器官はあるが、普通に食事をしている限りでは特に必要がない。リサもうつかり苦手な辛いものを食べて、水をがぶ飲みした時にお世話になったくらいで、「どうなっているんだろう」と自分の内蔵を透視してみたものの、見た目ではよく分からない上に気持ち悪くなって追求を諦めた過去がある。

ちなみに涙目で「じいや、おしっこしたい……トイレどこ？」と訴えざるをえなくなっただのはリサにとつては葬り去りたい黒歴史であるが、アーネストにとつては忘れがたいリサ7歳のメモリアルである。もじもじと頬を赤らめてふるふる震える嬢様のお可愛らしさを忘れられるわけがございません。

閑話休題。

「これからいろいろ教えてくれる先生二人を紹介するね」

リサがそう言つて5人を連れていったのは、壁にずらつと本が並び部屋。大きな長方形の机が真ん中に置かれており、椅子が6個その周りに並べられていた。

その奥にある長椅子の前には、青っぱい黒髪の女の人が立っ
てて。

「え……？」

その綺麗な女の人の頭には、柔らかそうな兔の耳が付いていて、
レインはぼかんと口を開けた。

「この人はミアン。ええと……人界には、獣人がもうほとんどい
いって聞いているから、多分見るのは初めてだろうと思うけれど。兔
型の獣人と夢魔の合いの子の魔族なの」

「……よろしくね」

少し恥ずかしそうに微笑む彼女は優しくそうで、そして見ていてな
んだかどきどきしてきて、レインは困惑した。

が。

「見とれすぎだおまえら」

低い声。女の人の陰からのっそりと起きあがったそれに、レイン
はぞつと青ざめた。彼だけではない、五人ともが思わず一歩下がっ
た。メリスメルなどは、小さく悲鳴を上げてリサにしがみついでい
る。

そこにいるのは獰猛な獣。立ち上がった体は巨大で、爛々と輝く
瞳は鋭い琥珀色、巨大な口元からのぞく鋭い牙　犬歯などという
生やさしいものではない　は、人間の体など簡単に引き裂けそう

だ。実物を見たことなど一度もないが、黄色と黒と白の縞模様
に、レインは聞いた話を思い出した。

「虎……っ!？」

裏返った声が漏れる。森の中や林の中にあることがあるという、
大型の獣。 どうして、それが、ここに!？

逃げようにもこの場所は狭すぎるし、背中を見せたとたんに襲わ
れそうで、彼はじっと相手を観察した。

違う。ただの虎じゃない……虎の頭の、人間？

首から腕、胸元まではふさふさとした毛に覆われているものの、
その腹部は日に灼けた人間の肌の色がのぞき、その下は黒革のズボ
ンを履いているためわからないが、それは確かに二本の足で立っ
ていた。ミアンという女の人の細い腰に腕を回して。

「レイン物知りだねえ。彼は虎の獣人のゼス。大丈夫だよメリ
スメル、ミアンを口説かない限りゼスはそんな簡単に怒らないし、
人間は基本的に食べないから。安心して? ゼスも、いきなり
睨むのは止めて」

リサはそう言って、かたかた震えるメリスメルの髪を優しく撫で
る。それにフン、と鼻をならし、ゼスというらしい虎型獣人はどさ
りと再び長椅子に座った。ミアンをその膝に乗せて。

「ちよつと、ゼスっ……」

ミアンが焦ったように身じろぎするが、ゼスの腕は彼女をがっち
り拘束してびくともしない。リサは小さく息を吐いた。

「ええと。 見ての通り、二人はとても仲がいいので、ミアンを
口説こうとする時は死ぬ覚悟を決めてからにしてね。その時の責任
はもちません」

「リサ、訂正しとけ。 触ったら殺す」

「ちよつとゼス何言ってるのっ」

「そうだよゼス、不可抗力ってこともあるわけだし」

「んじゃ意図的に触ったらその腕ぶったぎる。それでいいな?」

ぎろつと琥珀色の目がレイン達を見回す。どう見ても本気なその

眼差しに、一同こくこくと頷いた。多分やる。本当にやる。気をつけないと！

「……相当大人げないよ、ゼス」

深いため息をついてリサは言うが、立ち上がるうとするミアンを引き寄せつつゼスは半眼でリサを見た。

「おまえな、6年間こいつら育てる気にいるんだろうが。ガキの6年はデカいぜ？ 特に人間のガキなんか結構あっさりデカくなりやがる、今から伸びるだろうがこいつら」

「うんまあミアン可愛いから何もしなかったらうっかり好きになるのは当然だけど」

リサは重々しく頷き、5人を振り返った。

「まあ、二人は分かってもらえたと思うから、この子たちを紹介するね。この可愛い子がメリスメル、朱っぽい金色の髪の子がレイニール、茶色い髪の子がシグルド、銀色の髪の子がアージエント、黒髪の子がウエンデルベルト」

「名前長えよ」

間髪入れずにゼスがうんざりという口調で言い放つ。

「その娘っこがメル、気の強そうなのがレイン、ぼけっとしてんのがシグ、生意気そうなのがアル、妙に魔力強いのがウエンでいいだろ」

端的な あんまりにもな表現であるが、言われた子どもたちは素直にこくこくと頷いた。反対して睨まれるのは怖いし、特に反対する理由もない。ミアンは呆れたようにため息をついているが、リサは5人を見て首をかしげた。

「皆、いい？」

「うん。元々そう呼ばれてたし」

レインが頷くと、他の面々も再度こくりと頷く。

「じゃあ。ミアンは私の先生でもあってね、魔法の勉強を教わっているの。一緒に勉強しようね」

「僕たちにも、使えるの？」

訊いたのは、アージェント　アルだ。リサの視線を受けて、ミアンが頷く。

「ええ。確かにその黒髪の　ウエンの魔力は強いわ。人間ではとても珍しい。でも、普通の人間も、個人差はあるけれど、魔力はあるの。訓練すれば、上手に引き出すこともできるようになるわ。：あなたたちのなかに、ゼスのような抗魔體質の人はいないみたいだし」

「……こうま？」

シグの問いに、ゼスは肩をすくめて答える。

「魔法や魔力の影響を受けにくい体質ってやつだ。だから俺は魔法は使えない。あくまでも、受けにくい、であって、受けない、というわけじゃねえからな、そんな便利な物でもない。魔法が使えた方が楽だと思っ時のが多いな。人界だと魔法使いの数は少ない、余計にそうだろう」

「そうね。魔法を使う時に、魔力の強弱　強いか弱いかは、効果の範囲や効き具合を左右するけれど、実際に使うとなると、魔法を使う技術の方が重要になるわ。魔族は魔力は強いけれど、制御がなっていないという人も多いから、研鑽を積みめば、人間でも魔族になわないということはないわ……普通の相手なら」

「ええと……普通の相手じゃないときは？」

レインの問いに、真顔で答えたのはゼスだ。

「相手になった段階で終わりだ。死にたくなければ敵に回すな。逃げようと思っても無駄だからな。ひたすら従順になれば運が良ければ生きていられる。まあその前に殺してくれって言いたくなる目にあうがな」

「ゼス……そんなに脅さなくっても」

青ざめる5人の顔色を見て、リサが口を挟むが、ゼスはそんな彼女を半眼で見た。

「自覚しろ、おまえらのことだ、リサ」

「私はこの子たちにそんなこと！………ら？」

早口で言いかけたリサは、ふと眉を寄せてゼスを見た。

「あの人、あなたに何かしたの？」

「ここで言えるか阿呆、それこそ刺激が強い」

「……なんでもっと早く言わないのっ」

「あのな。おまえの父親に八つ当たりされたっっておまえに報告したって、おまえを困らせるだけだろうが。俺にしたって恥になる話だ、吹聴したいわけじゃねえ。ただ、こいつらが血迷って脱走した時に何があるか位分らせておいた方がいいと思っただまでだ。

デйнаレンス公爵閣下は間違いなくこいつらを排除したがる。おまえについたゴミとしか認識しねえよ」

ゼスは、次いで5人を見た。

「これは脅しじゃねえ、事実だ。死にたくなければこの家から逃げだすな。生き延びたいなら強くなれ。魔界に来ちまったんだ、覚悟決めろ。……少なくとも俺はそういう風におまえらに接する」

レインは、ゼスの言葉に、口の中が乾いていくのを感じていた。事実、と、ゼスは言った。おそらくそれは確かなことなのだろう。

けれど、それなら、自分にも一つ、確かなことがある。

「……逃げないよ」

レインは、しっかりとゼスを見返して、言った。

「僕は逃げない。まだ弱いから、ここで、強くなる。リサの望みをかなえられるくらい」

だから、と続けて。

「よろしく願います 先生」

頭を下げて、虎の目を再び見返すと、ゼスは鋭い牙を見せてにやりと笑った。

「……悪くない響きだ。リサ、これは本人が望んだっていうことではないな？」

「そうなん、だけど ゼス、ちょっと早いよ……まだ私レインにしかろくに説明してなかったのに」

リサの言葉に、ゼスは再び半眼になる。

「それこそおまえが遅いんだろうが何やってんだ」

「ここで話そうと思ってたんだよ。っていつかゼスがそんなにざくざく話してくと思わなかつたんだよ」

「おまえが自分の子ども育てるようになって言うからその通りしてみただけだ。知識は生き抜く術だ、与えて何が悪い」

「悪くないよっ、悪くないけど……」

リサは肩で息をする。可愛くて綺麗なりサだけど、ゼスと話をする時は自分たちに向けるよりもずっと表情豊かで、少し、ゼスがうらやましく思う。そんな彼女に。

「……リサの望みって、何？」

訊いたのは、シグルド。リサは、少し困ったような表情で振り返る。

「何を協力したらいいの？」

メリスメル　メルが問う。

そんなことも聞いてなかったのかと、レインは答えづらそうなりサに代わって言うことにした。

「出世して、偉くなって、　リサが世界を征服しやすいように協力するんだよ」

彼の言葉に、メルはぼかんと口を開け、シグはなるほど、と頷き、アルは目を見開き、ウエンはいまいち分かっているのか謎な無表情ながら頷き、ゼスとミアンは顔を見合わせ。

「ちよつと待つてレイン！」

リサの制止に、5人はそろって彼女を見た。リサはぱたぱたと激しく手を振ってかぶりを振っている。

「いやいや私そんなこと言ってないよ？　出世してほしいとは言ったけど、世界征服なんて絶対言ってないよっ？」

「でもリサ、自分は良い魔族じゃないし、見返りを求めてるって言うたから……違うの？」

「違うよー！」

リサは力強く否定する。そんな彼女にレインは訊いた。

「じゃあ、何してほしいの？」

「……とりあえず、立派に大きくなってほしい」

どうして、こんなにリサの口調の歯切れが悪いのだ。

「大きくなってからだよ。見返りって言ってたじゃないか。それだと、こっちがもらいっぱなしになっちゃうだろ？」

「別に、いいよ」

リサの視線はなぜか泳いでいる。それが歯がゆくて、レインは半泣きで詰め寄った。

「よくないよ！ 子どもだから言えないことっ？」

「いや、そうじゃなくて……」

「リサあっ」

レインがリサの腕をつかむと、リサはきゅ、と眉をひそめてレインを見て。

「……あの、ね。……侍女になりたい、の」
そう、言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3437x/>

魔界公爵令嬢の野望？

2011年10月22日05時38分発行